

授業改善のヒント

-京都産業大学の試み-



教育エクセレンス支援センター

FD推進委員会

S. Saeki

授業改善のヒント 京都産業大学の試み

はじめに - 「豊かな教育風土・教育文化を培うために」 -

京都産業大学に平成15年4月、「教員の教育能力を高め、ファカルティ・ディベロップメント(FD)活動を支援し、教育の質のエクセレンス化を図ること」を目的に、「教育エクセレンス支援センター」が設けられ、そのもとでFD推進委員会が活動を開始してから2年目になる。

その間、センターでは、数度にわたってFDに関わる教育講演会を開催し、本学教員に対して先進的な教育実践事例を学ぶ機会を提供したり、新任教員に対するFDワークショップを実施してきた。また、平成16年7月および11月には、全学一斉公開授業週間を設けて、授業の相互参観による経験交流を進めてきた。

本書は、平成15年秋以降二度にわたってセンターが行った「FDアンケート」=「日々の授業について、困っている点や具体的な工夫についてのアンケート」に対する教員の回答が情報ソースになっている。アンケートを実施して改めて感じ入ったことは、教員たちがそれぞれさまざまな工夫をして、日々の授業改善に取り組んでいるということである。FD推進委員会では、膨大な回答内容をまとめるのに約半年を要し、平成16年6月に「第2回FDアンケート回答に見る授業改善の工夫」として冊子にまとめることができた。しかし「宝の山」とも言える教員たちの授業改善の工夫の数々をそのままにしておくのはもったいないということから、これをより身近なハンドブックとして、いつでも参照できるようにすることとなり、本学版「ティーチング・ティップス集」にまとめあげた。それが本書である。

本書は、アンケートに寄せられた授業方法についてのさまざまな工夫をもとに、FD推進委員が各項目ごとに対話形式で執筆したものである。その意味で、本書は、京都産業大学の教員たちの日々の授業

改善・工夫の結晶と言える。この結晶を本学教員がつぶさに熟読玩味し、本学のすべての授業に活かしていくことができるならば、本学の教育の質の向上に資することは疑いない。

言うまでもなく、大学の第一義的な目的は、「知の創造と継承」である。研究と教育が大学の使命であり、この使命をどれだけ果たしているかによって大学の評価が決まる。研究にしても教育にしても、内容の質が問われる。

教育の質をどのように高めていくか。それには教員の教育力を高めることがまず求められるが、大学の教員は、研究者としての修養は積んできて、教育のための研鑽は個人的な経験主義に任されてきた。一人ひとりの教員は、さまざまな工夫を凝らし、学生と向き合って、教育にあたっている。そして時には、授業がうまくいかなくて悩むこともある。なかなか、自分の授業のことを他人にあからさまにすることに自信が持てないこともある。そんなとき、同僚教員の助言や教員仲間との話し合いが助けになる。

しかし、大学教員は、フランクに授業方法について互いに交流することには向かわない傾向がある。互いにアドバイスし合う教育風土が求められるが、まだまだ個人の枠から出て行くことはしづらい面があるのが実情である。

そのようなとき、本書をひもといてもらえたら幸いである。本書によって、個々の教員がどのような工夫をしているかをつぶさに見ることができるのである。本書が、京都産業大学の教育風土を培い、教育文化の向上に役立つとともに、同じ思いをもつ他大学の教員にも広く活用されることを願いたい。

京都産業大学
教育エクセレンス支援センター長
河野 勝彦

目 次

第1章 変化することが求められている大学教員

1. 教育の重要性の高まり 8
2. 現代の大学生気質 13
3. 現在求められている教員とは？
 - (1) 学生によりサービスを提供しよう 20
 - (2) 自分探しの援助者となろう 21
 - (3) 客観的な評価をしよう 23

第2章 授業を改善するには

1. 授業を計画しよう
 - (1) シラバスを作ろう 26
 - (2) 教材を選ぼう 30
2. 授業をしよう
 - (1) 授業を組み立てよう 32
 - (2) 話し方に注意しよう 33
 - (3) 板書に注意しよう 36
 - (4) 情報機器を利用しよう 37
3. 学生の参加を促そう
 - (1) 学生とコミュニケーションをとろう 40
 - (2) 私語に対処しよう 42
 - (3) グループ学習をしよう 45
 - (4) ディスカッションしよう 47
4. 授業時間外の学習をさせよう
 - (1) 予習・復習をしよう 53
 - (2) レポートを書かせよう 53
 - (3) 個人およびグループの発表の準備をしよう 54

5. 成績評価をしよう	
(1) 成績評価の基本原則とは	56
(2) 成績評価の実際	58
(3) 成績評価で気をつけるべきこと	61
6. 多様な受講生に配慮しよう	64
7. 公開授業をしよう	71
第3章 授業の新しい試み(特色ある授業実例集)	
1. 経済学教育における実験(ゲーム)の利用	
経済学部 小田 秀典	78
2. ビデオ教材による、税務会計の学習(マルサの女をマルサする)	
経営学部 小池 和彰	83
3. 大講義科目における Tips ~ Web 上で、教室で	
法学部 吉永 一行	86
4. ビデオ撮影を利用した実践的英語会話コース	
外国語学部 ギリス フルタカ アマンダ	90
5. グループワーク導入の試み	
文化学部 鬼塚 哲郎	93
6. ディベートに特化した授業	
文化学部 小林 一彦	97
7. PowerPoint 教材による授業の一つの試み	
理学部 藤井 健	102
参考文献	106
索引	107
編集後記	109

登場人物紹介

堀川 教授



堀川 教授

教員生活30年のベテラン教員。
考え方が古い。もちろん、教育も熱心に行ってきたが、研究重視の傾向がある。

北山 助教授



北山 助教授

教員生活10年の中堅教員。
最近の学生の変化をとらえ、柔軟に対応する。

葵 講師



葵 講師

教員生活1年目の新任教員。
教育に関して、迷いや戸惑いを感じている。コンピュータが得意。学生とコミュニケーションをとりたいと考えている。

(註) 本書中のPowerPointは、米国Microsoft社の登録商標である。

第1章

変化することが求められている 大学教員



第1章 変化することが求められている大学教員

1 教育の重要性の高まり

(夏休みのある日、春学期の成績提出のため、出校途中の中堅教員北山は、地下鉄北大路駅バス乗り場で同じ学部のベテラン教員堀川、新人の女性教員葵と出くわす。そして間もなくバスが来て、3人は最後部席に並んで座って話し始める。)

北山:堀川先生、今日は研究室でお仕事ですか？

堀川:今日は、春学期の成績提出の締切りなんでね。もちろん研究室にも寄って仕事もするよ。

北山:ぼくもです。毎回締切りギリギリに提出に来るんですが、ベテランの堀川先生もギリギリに提出やなんて、意外ですね。

堀川:いやあ、答案の枚数多いし、わしなんて旧式の人間やから、論述式の問題ばっか出すやろ。そやから採点に時間がかかるんや。履修者が500人、600人となってくると、この方式やと採点だけで1カ月ぐらいかかるんや。

葵:あら、わたしなんて、オール・マークシートで、らくらく(楽々)でしたよ。とっくに成績出しちゃいました。

北山:うーん、それも考えもんやね。マークシートやと、採点の手間は省けるけど、学生がええ加減にしか勉強せえへん。まあ判定には問題ないやろうけど、試験を受ける学生側からすると、「正解が選べる程度に勉強すればいい」という感覚になってしまうんやないかな。

葵:確かにそうかもしれませんわ。

北山:それにしても、採点に1カ月やなんて、かつて通年科目が主流や

った頃はそういう苦労も年に1度で済んだんやけど、セメスター制になってからは年2回、しんどいわ。

堀川：特に夏休みは、以前は丸々研究に使えたんが、今は半分が採点に取られるという感じやなあ。

葵：それでも残り半分は研究に使えるわけですよね？

堀川：そんなん言うてられんの、(就任)1年目だけやで。残りの半分もオープンキャパスに動員されたり、会議があったり、そこで「宿題」が課されたりで、昔に比べたら今はほんまに自分の時間がなくなってるわ。あんたも来年からいろんなことに使われるで。

葵：…………。

北山：堀川先生のおっしゃるとおりですわ。実はぼく、今日は成績提出以外にも、夏休みにもかかわらずFDの会議というのがありまして。

堀川：FD？フロッピーディスクの会議かな？

葵：先生、そのギャグはもう古いですよ。

北山：その会議で京産大版のティーチング・ティップス集を作る話し合いをすることになってるんです。

堀川：チップス？あのパリッとして塩辛いやつ？そんなもん産大で作らんかいな？

北山：それはポテトチップスですがな…。

葵：先生方、ボケの連発はやめてください(笑)。

北山：ティーチング・ティップスというのは、教授法の秘訣集のことで、名古屋大学のものが有名です。最近ではそれにならって、いろんな大学でその種のもが作られるようになってきました。うちの大学でも、うちの大学の実状に合ったものをと…。それでぼくも分担した分の「宿題」を持ってきたんです。先日、うちの大学でアンケートをとりましたが、あれを利用して、うちの教員の教授法を集

約したものを作ろうというわけなんです。

堀川：そういうもんができるようになったというのも、大学教員に従来以上に教育力を要求するという時代の流れかもしれないね。わしも授業スタイルを見直さなくてはいかんかもしれないね。

葵：先生の場合は、無理にスタイルを変えなくてもいいんじゃないですか？ご自分のスタイルに磨きをかければ。

北山：そうですよ。みんなが同じマニュアルで、同じような授業のやり方したら気持ち悪いですよ。ロボットじゃあるまいし…。「ティップス集」からは、取り入れたらいいところは取り入れたらいいんであって、むしろこういうものをご自分自身の教授法を見直すきっかけにしたらええんちゃいますか？

葵：新任のわたしの場合は教授法以前に、授業の中身を充実させないと…。

堀川：もちろん研究も重要や。どんどん研究して、学会発表やって、論文書いて、それが授業に役立つんじゃないかと思うよ。

葵：でも、年々研究の時間がとれなくなってるっていうお話ですよ。

堀川：ああ、そやった、そやった。今はたとえば入試なんかも多様化して回数も増え、それに取られる時間も多なってるし、何やかんやで研究時間がどんどん狭められてるという気がするなあ。

北山：そういう、多忙のために研究時間が狭められてるという問題と、もう一方で、先ほどのお話にあったように、研究か教育かでいうと、教育の方を重視するという流れにだんだんってきてるという問題がありますね。

堀川：そうやね。2つの問題は重なってる部分も多いけど。つまり、一つには根底に学生の学力低下という問題があって、その学生をどう教育したらいいかということをいろんな角度から考えるために種々の会議が開かれるという側面がある。それと、教員が難しい

言葉で独りよがりの授業をしがちであった古い時代の授業への反省もあるんやと思う。

北山: 教員は大学の研究室に閉じこもっていないで、世間一般の人たちに向けて発信すべきであるという考えも当たり前になってきてますよね。昔はそんなんしてる教員は、むしろバカにされてたんじゃないかと思うんですけど。

堀川: うーん、時代は変わったなあ。昔は教員の採用かて、どれだけいい論文が書けるかが最重要事項やったけど、今は、模擬授業やらしたりして、教育的な要素も見るなあ。

葵 : あっ、そういえば私もやりましたわ。

北山: 最近の流れとしては、研究に重点を置くのはほんの一握りの大学で、あとは教育の方に急傾斜してますね。日本人というのはどうも一つの方向に行ってしまうがちで、研究か、教育かということになってしまう。もっとうまく研究と教育を両立させる方法はないですかねえ？

堀川: 教育重視の大学かて、研究業績は研究業績で求めている。問題は、さっきからの話に出てるように、そんな、何もかもやるような時間がなくなってるということや。

北山: うーん、研究をしっかりとやって、それが教育に生かせる、そういう態勢づくりをみんなで本気で考えていかんとあかんですね。「忙しくても時間を有効に使えば研究はできる」ではすまされへん話ですよ。

堀川: 教え方ばっかりうまくても、根底でええ研究してへんと、空疎な授業しかできひんと思うわ。それはそうと、北山先生、ティップス集は帰納的なアプローチだけではなくて、演繹的なアプローチも必要やないかと思うな。つまりな、わしらが今ここで話したような、教育重視の傾向、また近年の学生気質の変化、そして、それらを

踏まえた教員のあり方のような理念をまず定めて、そこから教授法を導いていくというような試みも、一方ですべきやとわしは思うよ。

(賀茂川の美しい流れを横目に走っていたバスは、やがて上賀茂橋にさしかかる。川には鴨が泳ぎ、中洲には青鷺や白鷺が佇み、大きな石の上では亀が甲羅干している。われらの京都産業大学はもうすぐだ。)

(井奥 成彦)



2 現代の大学生気質

堀川：わしが最近腹立てとるんは、授業中、机の上にドリンクの入ったペットボトルを立てている学生がいることやね。こっちが一所懸命話しとるのに、平気で一口飲んどる学生がおる。

葵：先生、それならまだいいですよ。わたしの授業では、教室の後ろの方なんですけど、ホットドッグをかじっている学生がいたんです。教室でお茶ぐらいならまだしも、授業中に食事をとるのはやめてほしいです。

北山：この頃の学生は、お客様意識というか、視聴者意識で講義に来てるのかもしれないね。あるいは、リビングでお菓子をつまみながらテレビを見ているようにして講義を聴いている感じかな。でも、教室でやって良いことと悪いことって、時代によって変化するもんちゃうかな？今は学会なんかでもお茶を飲みながら発表したり、聴衆も飲みながら聴いたりしますし、お茶ぐらいなら教室で飲んでもいいかもしれません。

堀川：なるほどな。でもそれは教室によって違うんかもしれへん。たとえば、ゼミなんかでは、お菓子を食べながら授業したりしても、先生が許可すればいいかもしれへんね。

北山：堀川先生、それにしても、最近の学生は、文句もよく言ってきますよね。自分たちは授業料を払っている客なんだから、教員はしっかりその対価を講義によって支払えという意識があるのかもしれない。

堀川：確かにそやね。休講したり、遅刻したりすると、事務室に抗議に来る学生もいるからな。この講義一回につき我々は何千円を払っているんですとかいうのもおるなあ。

葵：でも、その意識はある意味で正しいようにも思います。我々教員は学生の学費に対して、きちんとしたサービスを提供しなくちゃ

いけないと思いますわ。この頃の学生はとても真面目だと思いますせん？ひと昔前は大学のレジャーランド化なんて言われてましたが、この頃、全体的に出席率いいですよ。

北山：同感です。ぼくらの学生時代のときより真面目かもしれません。こちらがテーマを与えれば結構よく調べてきますし。

堀川：不況で就職事情が厳しいのも一因かね。なまけ学生は企業もとらへんしな。

北山：ともかく、この頃の学生は、少しお節介なくらい教員がアドバイスしてあげなくてはいけない面があるけれども、基本的に真面目やと思います。

葵：ええ。勉学への意欲だって結構ありますし。教員がどうケアするかが問われますね。

堀川：ただ、この頃の学生はどうもすべてに関してクールやねえ。たとえばゼミでコンパしようとしても、アルバイトが忙しいとかで集まりが悪いんや。夏休みに合宿しよういうてもなかなか乗ってこへん。

北山：堀川先生、わたしのゼミでは女子学生の方が、積極的です。クラスの主導権は、女子が握っていて、イベントごとは何でも女子が中心ですわ。

堀川：うむ、これもご時勢なのか、女子学生はそういうイベントが好きやねえ。男子学生は万事に消極的だ。授業中の発言をみてもそう感じるね。なんで男子はこよう冴えないというか、くすんでるんかなあ。

北山：女性の時代なんでしょうか。集団行動に参加しないのは、アルバイト優先もあるのですが、人間関係の中で傷つきたくない、という気持ちもあるんじゃないでしょうかね。サークルにも加入せず、さっさと家に帰ってしまう学生も多いですよ。

葵：かといって、決して一人が好きというわけでもないんです。みんな

友達がほしい。なのに思い切って誰かに声をかけて親しくなるってことができないみたい。うまく対人関係が作れなくて、思い悩んでカウンセリングを受ける学生がすごく多いらしいですよ。

堀川：うーん。今の学生はひ弱なんかなあ。五月病なんて今や死語やと思ってたんやけど、むしろ学園生活に溶け込めず悶々としている学生が増えてるようなね。

北山：だから、甘い声をかけてくれる者があると、すぐになびいてしまうのかもしれない。ほら、この頃の若者は不可思議な団体に走っていうでしょう。彼らは自分たちの孤独をもてあましてるんじゃないですか。

葵：ええ。彼らに対して教員が何かしてあげられることってあるのかしら。心の問題をかかえた学生には、素人が余計なアドバイスをするのはかえってよくないと聞きますし。

北山：授業で欠席が目立つようなら、こまめにその学生とコンタクトとることが大事やと思います。たとえば2回、3回と続けて休むと、学生のほうも変に気を回して、もう授業に顔出しできなくなっちゃうようです。だから、教員のほうから、来週は来たらどうやと電話してあげると、ほんとに喜んで、見違えるように立ち直る場合も多いんですよ。

堀川：そうやな、今の若者はだいたいおとなしいんや。わしのゼミではディスカッションをすることがあるんやけど、ええメンバーが集まった年、コアになるような学生がいる年は結構盛り上がるんやけど、そうでない年はディスカッションやってもなかなか発言が出えへん。あんたはなんか工夫しとる？

北山：ディスカッションですか。ぼくも取り入れています。最近の学生はほっておくとさっぱり動かへんし、能動的に参加する必要に迫られるディスカッションは、教育的効果がありますね。堀川先生、ま

ず、ディスカッションそのものの工夫以前に、今言ったように、それなりのメンバーを揃えること、あるいはコアになる学生が来るようにする工夫をしてみてもええんやないですかね。

堀川：どういうこと？

北山：たとえばゼミ生を募集する時点で、そういう学生を集める工夫をするんです。

堀川：募集要項に「積極的に発言する学生を求む」とか「リーダーシップを取れる学生を求む」って書くとか？

北山：そうですね。それと、応募者が定員をオーバーしてセレクションをすることになったら、そのへんのとこよく見極めて学生を選ぶことが重要やと思います。

堀川：けど、そううまくいく年ばかりもないやろうし、とにかくどんなメンバーでも、決まったら、そのメンバーでやっていかなあかん。

葵：そういえば、わたし今初めてのゼミを終えてきたんですけど、みんな表情が硬いんです。自己紹介なんかさせても、自分の名前しか言わない。そこで、「名前だけじゃなくて、もうちょっと趣味とか、サークルとか、そのほか何でもいいから言いなさい」って言ったら、今度は「名前は です。趣味は です。」で終わり。自己紹介からこんな調子では、これからのゼミが思いやられますわ。今後ディスカッションになった時、発言なんかできるんでしょうか？

堀川：まあ、学生はこっちが思ってる以上に緊張するもんやで。それと、「そのほか何でもいいから」と言われても、どう言うてええんかわからんのちゃう？そもそもあんたが最初に自己紹介した？

葵：あ、してません。

北山：先生が最初に見本を見せれば、学生もそれに習うんちゃいますか？それに、学生は先生に興味を持ってるもんですよ。まだ新任やから無理もないけど、先生の方からほぐす努力をしたらええ

と思いますよ。

葵 : 学生より私の方が緊張してたのかもしれませんが。

北山 : ところで、大学の教育の中でも、ディスカッションというのは一番難しいような気がしますね、講義なんかよりも…。けど、一つの方法として、予め前の週に次の週のディスカッションの課題を与え、必ず何か発言するよう言っておく、発言すればポイント与える、良い意見なら更に加算する、あるいは逆に発言しなければ減点するという方法はどうでしょうか？その場合、課題は具体的でなければいけませんけど…。

堀川 : ポイントをどうこうするというのは好みではないけどな…。けど、確かにアドリブではなかなか発言が思いつかなくても、予め宿題というかたちで考えさせておけば、何か言うやろね。

北山 : それから、グループを作らせて、グループ対抗のディベートという方法をとってるところもあると聞いてます。教員がレフェリーになって、勝ったグループには商品を与えるとか…。

堀川 : ポイントとか、商品とか、そういうもんで釣らんと(ディスカッションは)できんもんかなあ？

葵 : あら、でも盛り上がりそうですね。

北山 : そう、ディスカッションが盛り上がる雰囲気があるかどうかというのは、大事なことやないでしょうか？最近の学生は積極性に欠けるし、辛抱強くないですからね。ポイントとか、商品といったものは、あくまで学生を能動的に参加させるための手段であって、使わなくても盛り上がるような雰囲気があれば、使わなくてもいいんですけどね。

堀川 : そういう雰囲気を早いうちに作ることが…。

葵 : 教員と学生、あるいは学生同士が打ち解けられる雰囲気作りを、早いうちにするにはどうしたらいいんでしょうか？

北山：月並みやけど、たとえば早いうちにコンパをするとか…。

堀川：コンパは最初はできるだけ強制的に参加させた方がええかもね。
そうすると、引っ込み思案の学生も、仲のいい友達を見つける機会ができる。

北山：あるいは、早いうちに合宿をするのがええんじゃないかと思います。
幸い、うちには「神山研修棟」「松の浦セミナーハウス」というすばらしい施設がありますから、なるべく早い時期の土・日などを利用して1泊2日ぐらいの合宿をやって、授業のガイダンスをするとともに、ざっくばらんに社会のことや将来のことについて語り合う、あるいはいっしょに遊ぶ、みたいなことをやったらいいと思いますよ。学生は同じ部屋の者同士夜遅くまで語り合いますよ。1泊するだけで、全く雰囲気が変わります。

堀川：けど、合宿というのは大層やなあ。

北山：それなら、たとえばこういう方法もありますよ。最初の時間は天気がよければ教室を出て、飲み物とお菓子でも買って、外で飲んだり食べたりしながらざっくばらんに語り合う。あるいは何かゲームをする。

葵：けど、うちの大学にそんな場所ありますか？

北山：噴水あたりでも、ピロティーあたりでもええやないですか。先ほどの自己紹介なんか、ゲームとしてやる方法もありますよ。**

葵：雨が降ったら？

北山：「スイート・ペッパー」とか、「ラウンジふるさと」とかで飲み物を注文して、ということもできますよ。

葵：そうですね。確かに、お互いが打ち解けて、気軽に話せる雰囲気ができたら、後々のディスカッションも結構うまく行くかもしれせんね。

**自己紹介ゲーム

最初の人「 です」と言い、後は次々と「 君の隣の
 です」、「 君の隣の さんの隣の です」・・・と
つないでいき、間違ったら止めて隣の人からやり直す。最初に
小さい菓子を各自3つずつぐらい持たせておき、間違うたびに
一つずつ没収するなどの方法を探ると盛り上がる。間違わず
に一巡できるようになったらやめるが、完結できないからとい
ってあまり長時間にわたるとだらけるので、その場合、適当な
切り上げ方をすることも必要。これによりお互いの名前も早く
覚えられる。

(河原地 英武)



3 現在求められている教員とは？

(1) 学生によりサービスを提供しよう

葵：北山先生、新しいクラスが始まったんですけど、最初にどんなことをすべきなのかしら？

北山：ぼくの場合は、学生の顔と名前をまず覚えますよ。学生は教員が名前を覚えていると、それだけでもうれしいものだし、教員に親近感もわきますよ。

堀川：年のせいか最近学生の名前を覚えるのが難しくなってきて、わたしは大変や。

北山：しかし、先生、学生に対してサービスを提供する義務がわれわれにはあると思いますよ。自分の研究だけではなくて、授業を研究するという必要やと思います。中学や高校で授業の準備をすることを教材研究と言いますが、今までの研究に加えて、教材あるいはクラスの研究も重要なと違いますか。

堀川：中学生や高校生と大学生はちゃうと思うよ。大学生に対しては自主性を重んじるべきやと思うわ。

北山：確かに、手取り足取りという教育はぼくも反対です。ですが、学生を後押ししていくのがわれわれの役割やとぼくは思います。学生に学ぶ意欲を持たせて、導いていく。失敗しても、挑戦したことのすばらしさを強調し、褒めて、また挑戦する方向に導く、それこそわれわれがやるべきことなと違いますか？

堀川：そない言うけど、教室行ったら、何や最近学生は、うるそうてかなわん。静かにしろ言うてどなっても、さっぱり効果あらへん。

葵：先生のようなベテランでもそうですか。私なんか、先週泣きそうになりました。

北山：私語ですか。確かにそうですね。しかし、静かにしなさいというよう

にしかりつけるのではなく、まず教室を魅力的なものにすることが重要なんじゃないですか。最近の学生は90分の授業に耐えられないという話もちょうくちよく聞きますし、“ネタ”をまぜるなど、学生を飽きさせない工夫も必要だと思います。葵先生も何かギャグでもどうですか。

葵 :なるほど、そうですね。先生、でも“ネタ”は難しそうです。わたしには…。

北山:それと、最近、小・中・高では、総合的な学習などのおもしろい試みもなされているみたいですし、あれなんかも参考にするとか。

堀川:自ら学び、自ら考える力を養うとかいうやつやな。でも、わしの知ってる高校の先生は、総合的な学習は、全然機能してないって言うてたで。むしろ、基礎学力が低下するんちゃうかってね。

北山:もちろん、基礎的な学力も伸ばさなあかんですね。けど、大学の場合は、多角的な視点から現象を分析する、総合的な学習が可能なのではないかとぼくは思ってるんです。まあ総合的な学習は一例にすぎないですが、学生に対して達成感や成長したという自覚もてる授業を提供せなあかんと思うなあ。教員の仕事はサービス業ですよ。どんどん工夫をして、学生に興味を持たせる、そして、学生が成長する。もちろん、われわれ教員も成長するでしょう。学生とともに教員もまた成長していく、それが、理想なんじゃないですかね。

(2) 自分探しの援助者となるう

葵 :堀川先生、先日「私ってどんな職業が向いていると思いますか」って、学生から尋ねられたんです。その学生は、優しくて世話好きな女子学生だったので、幼稚園の先生なんてどうですかって言ったんですけど、わたしのゼミの大原君にも聞かれてしまって、

適切な職業が思い当たらず、困ってしまったんです。

堀川：最近の学生は、何をしたいか、大学に来たのか、わからんのが多くて困る。人生の目標のようなものがない。場当たりの対応ばかりで、長期的な展望がまるでない。

北山：いや、堀川先生、むしろ、最近の学生は、ぼくらのときと比べて、意外としっかり考えてると違いますかね。現代の大学生は、かつてのように卒業に必要な単位だけ集めて、後は青春を謳歌するといった、キャンパスライフを送ることができなくなってるって、『現代大学生論』って本で読みましたよ。その本によれば、現代の学生には自分のやりたいことを考えて、職業を選択する傾向がみられるらしいですよ。

葵：でも、自分のやりたいことっていうのは、大抵は、趣味みたいなもので、職業として選べるのは、ほんの一握りの幸運な人だけじゃないかしら。村上龍の『13歳のハローワーク』っていう本があるんですけど、趣味は仕事と結びつかないっていう意味のことが書いてありました。たとえば、学生は最近スノボに夢中ですけど、スノボで就職できるとは思えませんわ。

堀川：確かにそうやね。それに現実には、やりたいことというわけやなくて、できるだけ世間的に評価の高い就職先を探そうという従来型の学生の方がむしろ多いように思うなあ。進路というのは本人の問題であって、結局自分で決めんとあかんとちゃう。学生は子供とはちゃうしな。

北山：堀川先生、結局最終的に決定するのは学生本人ですけど、学生はわれわれに何か期待のようなものを抱いてるとちやいますか。できたら、われわれ教員は学生の話聞いて進路に関するアドバイスをした方がいいし、あるいは学生の話聞いてやるだけでも、彼等のためになるんとかちやうかって、この頃ぼくは思う

んですよ。

堀川：確かにそのとおりやな。でも気をつけなくてはならんこともあるんちゃう。べらべら自分のことをしゃべるんやのうて、教員は、学生のよい聞き手でないとあかんよ。

(3) 客観的な評価をしよう

葵：学生の評価なんか難しいですよ。出席点、試験、平常点とか。

北山：確かに。人が人を評価するということは難しいですよ。たとえば、われわれはよく、平常点で評価なんて、シラバスに書いてるけど、多分あの中身は人によりまちまちやろうね。

堀川：それはそうやね。でもそれはともかく、成績評価が甘いと、いい人として慕われることもあるが、これから厳しい社会に出ていく学生に対して甘いだけでは教員としては失格やな。

葵：ただ、堀川先生、わたしが担当している学生の中に、奨学金の関係でどうしても“優”がほしいという学生がいて、実は、困っているんです。

堀川：えーっ！そんなの無視すればいいんや。けど困ったもんやなあ。今までは、学生に授業料を支払っていることに関する自覚が乏しかったが、長引く不況は学生にコスト意識を芽生えさせおったか。それは良い面もあるが、問題もあるなあ。だいたい、何点取るかが重要なのではなく、自分が何を得たかが大学では重要なやが、そこがさっぱりわかってへん。

北山：でも堀川先生、そういえば、クレームを言ってくる学生が最近増えたような気がしますね。ぼくは、学生が成績評価に関して、何かクレームを言うてきたときに、説明する責任がわれわれにはあると最近考えているんです。そのためには、学生のクレームがあっても答えられるように、われわれはなるべく客観的な評価を行う

必要があると違いますかね。それに常日頃から学生とコミュニケーションをとり、信頼性を確保しておくことも必要やと思います。

▶ **授業改善のヒント**

授業を休む学生にはこまめにコンタクトをとろう。

教員と学生が打ち解けられる雰囲気作りをするためにコンパや合宿をしよう。

学生に自分探しのアドバイスをしよう。

クレームに対処するためにも客観的な成績評価を心がけよう。

(小池 和彰)



第2章 授業を改善するには



第2章 授業を改善するには

1 授業を計画しよう

(1) シラバスを作ろう

(秋も深まった11月×日の昼休み、学内食堂で3人の教員が食事をしながら雑談。)

葵 :そろそろ、シラバスを書く頃ですね。わたしは、この4月から大学の教員になったばかりで、まだよくわからないのですが、堀川先生、全体として、どういうことを心がけたらいいんでしょう？

堀川 :まず、授業の目的と到達目標が学生に明確に伝わるように書かんといかん。つまり、この授業では何を学習するのか、この授業を通して何が得られるかということやね。また、他の授業との関係についても触れた方がいいんと違うかな。

葵 :途中での修正を最小限にしたいので、半年間の授業設計を綿密に練って、これに基づいて、授業内容を詳しく書こうと思ってんです。とくに、専門用語をできるだけ多く使った方が授業の中身がよく伝わるんじゃないかと思ってんですけど…。

堀川 :若いのにえらいなあ。そやけどな、実際の授業はなかなかシラバスどおりにいかんのやなあ、これが。けど、わたしは、大まかなことしか書いてないから、少しは見習わんといかんなあ。

北山 :確かに。ぼくも見習わなくてはいいけませんね。ただ、専門用語の羅列やと、学生は理解できるかなあ。わからなくて、受講する意欲が失せてしまうかもしれんよ。

葵 :じゃあ、専門用語は適度にした方がよさそうですね。

堀川 :そう、そう、読み出すと知的好奇心が沸き、授業の全体的イメー

ジが掴めて、この授業を受けてみたいという気にさせるのが理想や。それはなかなか難しいんやけど、まずは、学生が読みやすく、理解しやすく、授業の内容がよく分かるシラバスの作成を心がけんといかんね。

葵 : 読者の学生を想定して書くんですね。なんだか、作家になったみたいで、ワクワクしてきたわ。

堀川 : よっしゃあ、作家か。わしも、ひとつ腕を振るってみるか。武者震いしてきたぞう。

葵 : それから、授業内容なんですけど、毎年、少しずつ変えていきたいと思っているんです。どういう点に気をつけたらいいんでしょうか？

北山 : まず、前年度の試験結果を見て、学生が理解できていない部分は、少し時間をかけた方がいいんと違うかなあ。それから、新しい研究内容を付け加える場合には、どうしても教えないといけない基本的な内容は省かん方がいいと思うよ。

葵 : なるほど。それから、授業計画ですが、あまり細かく書いても、予定が狂うかもしれないという不安が実はあるんですけど…。

堀川 : わしは雑談すると止まらなくなってしまうんや。だから、予定より少々遅れるのが常でな。最近は、欲ばらんように書くことを心がけとるんや。

北山 : 確かに、ぼくもシラバス通り進まなくなることがあるなあ。そういう場合、途中で、シラバスの改訂版を配る先生もおられるみたいやね。

葵 : それなら、わたしは、授業計画表を Web に載せようかしら。変更することもあるから、授業前には、わたしのホームページを必ず見てねって、いうようにします。ところで、シラバスには、成績の評価方法の欄があるんですけど、どの程度まで詳しく書けばよろし

いんですか？年度によって、受講者の数が大きく変わるので初めから決められないですね。

堀川：出席点とか、レポートの点を加算するのは面倒なんや。そやからなあ、わしは、定期試験一発勝負をずっと続けてきたんや。それで、受講者が多くても、少なくとも「定期試験による」としか書かへんのんや。

北山：定期試験だけやと、学生は出席しないんじゃないですか？

堀川：10%も出ていれば十分、私語もなく、合格率は95%、それで学生は大満足と言いたいんやが、これは、10年以上昔の話や。今は、成績評価を厳しくしたせいか、かなりの学生が出席しとる。肝心の話よりも雑談の方をまじめに聴いとるようやけどな。

北山：アンケート調査によると、受講者数が年度によって大きく変化する科目は、「履修者数に応じて変更する場合もあり得る」という但し書きをつけている先生もおられるみたいやね。

堀川：そう書いても、最初の授業で凡その受講者数が把握できるんやから、そのときに成績の評価方法とその比率をはっきり伝えるべきやと、わしは思うわ。

北山：そうですね。それを聞いて、評価方法に不満がある学生は履修を取り止めればいいんですよね。

葵：それから、平常点ですけど…。

北山：平常点と言うても、出席点の他に、小テスト、レポート、発表もあるからね。平常点とだけ書いておくと、学生は出席点と勘違いするから気をつけないといけないね。

葵：基本的なことですけど、シラバスって本来はどういう意味なんでしょう？

北山：米国の大学では、最初の授業で受講者に配布する詳細な授業計画書を“syllabus”と呼び、われわれがシラバスと呼んでいるものは、

*"bulletin"あるいは"course description"と呼んでいるらしいね。
葵 :いろいろと参考になりました。

*『成長するティップス先生』(池田輝政ほか著、玉川大学出版部)の p.61 参照

新・双方向性授業



(2) 教材を選ぼう

葵 :ところで、シラバスを作るときに教科書を決めないといけないんですけど、何を使おうか迷ってるんです。何を基準に選んだらいいんでしょう。

堀川 :教科書は、学生のレベルに合ったものを選ぶことが一番大事なんとちゃうかな。

葵 :しかし、さまざまなレベルの学生が混じっているので、どこに合わせたらよいか難しいですね。

堀川 :少なくとも、レベルの高い学生にも役立つものでなければならぬし、その一方で学習の不十分な学生でも理解できるものでないといけないと違うかなあ。だから、ぼくは、教科書を使っていないんやけどね。

葵 :学生のレベルに合ったものが、見つからないということですか？

堀川 :他にも理由があるんやけどね。わしの担当分野は1冊の教科書ではカバーしきれへん、専門とする分野は変化が激しいんや。それから、授業内容が教科書に拘束されて、融通が効かなくなることもいややね。さらに、教科書があると学生は安心するんかなあ、授業に出てこんようになるんや。

北山 :ぼくは教科書を使っているんやけど、選定のときに心がけていることがあるんです。まずひとつには、内容が標準的であることですね。次に、必要な情報が含まれていること。さらに、最新の情報が含まれていることです。

もちろん、価格が高くないことや、学生にとってわかりやすいことも大事やけどね。

堀川 :フランス語の先生やけど、薄くって、適当な値段で、CD-ROM の音声教材が付いているものを選んで言うってたわ。そうやね。90分の授業中で変化をつけることができ、学生の興味を

持続できるようなテキストが理想かもしれない。

北山：ぼくは、さらに詳しく勉強したいという学生のために、参考書を挙げることもあります。それに資料として、適時、プリントを配布するようにしています。

葵：多人数の講義だと、プリントを教室へ持っていくのも大変じゃないですか。

北山：実は、ぼくは、枚数を減らすために両面にプリントをしたことがあったんやけど、それは資源の節約もあってね。でもね、学生からノートに貼れないから片面プリントにしてほしいとの要望が出て、結局、次回から片面に戻しました。

葵：授業で使う教材としては、教科書、参考書、プリントのほかに、ビデオ、OHP やパソコンによるプレゼンがありますよね。

堀川：わしはビデオを使っとるんだ。授業が単調にならなくていいんだな。

葵：それなら、わたしは、PowerPoint で教材を作ろうかしら。アニメーションも入れたら、きっと楽しいものになると思うんです。それに、スライドは簡単に修正できるから、絶えず新しい情報を取り入れられるし。どうやら、来年度は、かなりよい授業設計ができそうです。皆さん、ありがとうございました。そろそろ授業に行かなくっちゃ。では、失礼します。

(晩秋の日差しに紅葉が映える昼休みも終わろうとしていた。)

▶ 授業改善のヒント

シラバスは授業の目的と到達目標が伝わるように書こう。
教科書は学生のレベルに合ったものが望ましいが、適当なものがなければ、プリントを作成しよう。

(藤井 健)

2 授業をしよう

(1) 授業を組み立てよう

葵 : 来年度から大規模クラスの科目を一つ受け持つことになったのですが、授業の進め方について何かアイデアはないですか？

北山 : またやけにストレートな質問やね。そうやねえ、他の先生たちも含めて一般的にやられていることとしては、「授業の最初にその日の内容の概要を説明する」、「授業の最初に前回の授業内容を短時間でざっと復習する」、「ニュースになるような現実の事例となるべく結びつけながらやる」といったことがあります。

葵 : 1回の授業で内容が区切りよく完結するようにしてみようかと思うんですが。

北山 : そうやね、まあそういう方法がとれれば、それもいいんじゃないかなあ。今まで中小のクラスはどんなふうにしてたんですか？

葵 : シラバスに沿ってやるために、授業予定をなるべく詳しく最初に決めておいてプリントとして配っていました。評価基準(出席点、平常点、試験の配分)も最初に明確にしたり…。

北山 : とは言ってもシラバス通りに行かない年度もあるしなあ。やはり学生の理解度に合わせて進むのがいいんじゃないかな。

堀川 : そうやね、確かにそうや。わしはだいたいシラバスの内容を消化できんわ。わしは、まず説明をして、つぎに具体的な例題を出し、最後に参加者の回答をもとに解説するという3ステップ方式を採用しているんやけど、学生に割と好評なんや。

北山 : ぼくは最初に前回の講義内容のまとめと、それに関連するトピックス的なものを話し、講義時間の半分過ぎをめぐりに本論、その後ちょっと脱線させながら、残りの時間にまた本論を話す、というように心がけてますけど。まあ、でもこれはクラスの規模とは余り関

係ないかもしれへんね。

堀川：小テストなんかもいいんとちゃうかな。教員が一方的に話すのはよくないとわしは思うな。学生に何らかの作業をさすことによって、参加させたほうがええよ。

葵：私もレポートは何度か出していました。つまりゼミでやるような形式を中小クラスに持ち込んで学生の参加を促そうとしているんですが、まだまだ実験中というところです。みなさんいろいろ工夫されてますねえ。

北山：ただ話はそう簡単でもないと最近思うよ。適切な教材がないので毎回4枚程度の資料を配付している大規模クラスがあるんだけどね。この資料は最新ののものも採り入れたそれなりにレベルの高い資料に出来上がっているという自負もあるんだが、結局の所、何よりも講義の質は、教員がどれだけ講義のための準備時間を確保できるかにかかっていると思うんや。つまり講義の対象となるテーマについて、どれだけ最新の研究成果を調べ、それを自信を持って語る段階まで理解できているか、それが問われているんやと思う。

堀川：おお、北山君、なかなかいいこと言うやないか。あんたの言うとおりのやな。

(2) 話し方に注意しよう

(授業が終わった後の教室内で、受講学生の大原が葵に声をかける。)

大原：先生、お願いがあるんですが。

葵：大原君、なんですか？

大原：(少し言いくさうに遠慮しながら)あの一。すみませんが、もっとゆっくりしゃべってもらえませんか？先生の授業は内容が難しい

のに、進むのが速いんですよ。黒板を写していたら、先生はどんどん先に行くし、なに言うてはるかかわらんかったです。

葵：(どきっと心臓が強く鼓動する、葵先生。顔を赤らめて)うーん。で、できるだけゆっくりしゃべっているつもりなんだけど、まだ速い、それとも関東弁だからかな？

大原：関西弁は確かに聞きやすいですよ。でも、関東弁でもゆっくりやったら、大丈夫やと思います。それと、時々先生の話には英語が入るし、内容も難しいからなあ。(教室に残っていたその他の学生もうん、うんと頷いて葵先生の顔を注視している。)

葵：うん、ごめん。次回から、気を付けるね。(でも内心では、どこまでゆっくり話したら、この子たちは授業についてこられるのかしらと思いながら、葵先生は教室を出た。)

(教員控室で)

葵：北山先生、先ほどの授業で、学生さんからもっとゆっくり話してくださいっていわれたんですけど、先生はどのくらいのスピードで話をされていますか。わたしは、自分では結構ゆっくり話しているつもりだったんですけど、どこまでゆっくりしゃべったらよいのかしら？

北山：うーん、そやね。ぼくはあまり意識したことないなあ。普通のスピードでしゃべっているんちゃうかな。ただ、大事なところは繰り返すようにしたり、難しいと思えるところはなるべくゆっくり説明するようしてるなあ。

堀川：北山君なあ、近頃感じるんやが、どんどん学生の日本語理解力が落ちてんねん。わしらがしゃべっている日本語が理解でけへんのや。最近の学生は本を読まへんからな。ここは大学やで。もう少し、本を読んで、日本語の理解力を身に付けなあかんって、わしはいつも言うてるがな。

北山：確かにそういう傾向はあるかもしれませんがね。でも、葵先生はそんなに早口やとは思わへんけどなあ。学生は、おそらく葵先生が早口やから授業を理解できないんやなくて、葵先生の板書を写しながらやと、頭の整理がついていかれへんのとちがうかな。もう少し学生の様子を見ながらゆっくり進んだらいいんちゃう？ぼくが話し方で一番気を付けていることは、やっぱり学生の表情やね。授業についてきてくれているときは、しっかりとぼくの方を見てくれているし、わかっている、という表情をしてるんやけど、少しテンポが速すぎたり、内容が難解やったりして、だんだんと授業についてこれなくなると、学生の目がいろんな方向を向いたり興味を失ってることが手に取るようにわかるんや。

葵：北山先生のおっしゃるとおりかもしれませんがね。わたしが早口というのではなくて、学生がついてきているかどうか確認せずに新しい内容に進んでいたかもしれません。逆に私は、学生にわからないという表情をされることが怖くて、あんまり学生の表情を見れないんです。それに、つい授業を計画通りに進めようとして、自分のノートばかり見てたような気がします。

北山：やっぱり、学生の反応を見ながらあるときは早く話したり、テンポを落としたり、授業に緩急を付けることが大事やとぼくは思うな。

葵：はい、わかりました。学生についてきてもらうには、なかなか技術が必要ですね。

堀川：そうやなあ。最近の学生は飽っばいからなあ。わしは、学生が疲れてきたら、うまく雑談を入れるんや。そうすると、気分転換が図れて、みんながわしの授業にもう一度戻ってこれるんや。

葵：堀川先生は経験も豊富だし、さまざまなお話の引き出しを持っておられるのでしょかね。わたしは雑談をしたくてもあんまり経験がないなあ。

北山: 葵先生、そんなときは、学生に何か質問するのもいいよ。学生は
いっぺんに目を覚ますんちゃうかな。それに、いい答えが出た
ときは褒めてあげると、先生のファンにもなってくれて、授業に興味
も持つようになるん違うかな？

葵 : それなら、わたしにもできそうだわ。どんな質問をしたらよいか、準
備しておくといいですね。

(3) 板書に注意しよう

(教員控室のコピー機の前で葵先生は、授業に使うプリントを作成して
いる。)

北山: 葵先生、めっちゃたくさんあるんやん。それは今日の授業に使う
プリント？

葵 : ええ、そうです。今日の授業は大クラスなので、板書だと後ろの方
まで見えにくいと思って。それに学生はたくさん板書するとノート
を取ることに集中して話をあまり聞かない傾向があるので、詳
細なことではできるだけプリントで補充したほうが良いと思っている
んです。でも、大クラスだと、学生数が多いので用意するプリント
の枚数も膨大になって大変です。

北山: 頑張っているんやね。確かに、大きな文字で書くと黒板に書ける
内容が少なくなりますねえ。ところでちょっと聞いてみたいんやけ
ど、板書する内容と、プリントで配布する内容はどんなふうにして
決めているんですか？

葵 : そうですね。私は、授業の進行に合わせてその内容の要点だけ
を板書するようにしています。配布したプリントの中でも重要なこ
とは、もう一度板書するようにしています。そうすると学生も、授業
後に具体的にその疑問箇所を聞きやすくなるようですよ。

堀川: わしは、あまりきちんと板書せんねえ。きれいに板書すると、学生

が話を聞かなくても黒板を写しさえすれば授業を理解したかのような錯覚に陥るんや。だから、わしはあえて整理して書かへん。本来、大学生は、板書を見ながら、話の内容を理解して、自分なりにノート作りするべきやで。理想論かもしれへんけど、その方が、授業にも緊張感があるし、先生の言っていることを一言も聞き漏らすまいという姿勢が植えつけられるん違うかな？

葵：はい、それもよくわかります。でも、複雑な内容を説明するときには、板書だけでは限界がありますし、時間的にも制限があるので PowerPoint や OHP を使った方がいいんじゃないですか。ただその場合は、プリントも同時に配布して、あとから学生が復習できるようにしようと思っています。

北山：うーん、そうやね。PowerPoint や情報機器は複雑な内容を説明するときには優れた手段になるなあ。でも板書にもいい点があって、つまり板書の場合には、こちらの板書するペースが学生のノートを取るのと同調するんや。そうすると、こちらの意図や熱意が(情報機器よりも)よりよく学生に伝わっていくように思えるなあ。でも学生に参加させるとのほうがいいと思いますよ。ぼくの場合、よくやるのは、プリントを配布して、いくつか空白にしておいて、講義を聞いた学生にその空白を埋めてもらうようにしているんやけど。

葵：それもいいですねえ。学生を飽きさせないためのいい方法ですよ。

(4) 情報機器を利用しよう

北山：資料の提示に PowerPoint を使ってみようと思っているんやけど、葵先生、何か気を付けている事はありますか？とりあえず、「40ポイント程度の大きな、太い字体のものを使う方がいい」ということは、知ってるんやけど、他に何かあるかな？

葵 : プロジェクタの明るさや教室によっては、白地に黒文字より、黒地に白文字の方が見やすい場合があります。それと、1枚のスライドの情報量が多くなりすぎると学生はノートを取ることに専念して話を聞かなくなる場合があります。ですから、箇条書きを1行ずつ表示するアニメーション機能を利用して、情報を小出しにするように工夫しています。

北山 : しかし普通にスライドを作っていると、どうも文字の羅列になるんや、そうならへん？

葵 : プレゼンに関するビジネス書などを見ると「スライドは読ませるものではなく、見せるものである」とありました。文章をそのままスライド化することは避け、可能な限り概念図などを用いたビジュアルな表現を心がけて、ということでしょうね。

北山 : それは訓練が必要そうやね。ところで部屋を暗くしすぎると居眠りを誘発するやろうから、なるべく部屋は明るい方がいいんちゃうかな。ノートを取る学生の速度とスライドの進行速度が合ってるかどうか見ながら進めるためにも明るい方がいいと思うわ。

葵 : (スライドを見ながらノートを取る学生を想定しているということは、やはりスライドに文章をずらずら書くつもりなんだなと思いつつ)ところが部屋によっては前だけ暗くする、といった照明の操作ができないところがあったり、照明のスイッチが部屋の端にあるせいで時々明るくする、といった工夫が難しい場合もあります。事前に教室の状況を確認しておかれるといいと思いますよ。

堀川 : 照明の問題については、ビデオを使った時に同じことに引っかかったが、それよりも音が出るものは隣の教室の迷惑になる場合があるんや。窓を閉めるなど気を遣わんと・・・。

北山 : それは考えたことがなかったですね。注意しなあかんですね。ぼくがビデオを使ったときは長時間流すとやはり居眠り率が上がる

んで、こまぎれに流してその都度説明を加えました。

堀川: その種の教材は学生が「見るだけ」に流れがちで問題があるようにわしは思うわ。講義は五感を通して理解する事が大事で「書く」ことも重要な要素やで。北山君、居眠りをするのは照明ではなく、講義の進め方にも問題があるんやないのかな？

➡ 授業改善のヒント

授業の最初にその日の内容の概要を説明しよう。

前回の内容を復習しよう。

現実の事例と結びつけながら説明しよう。

学生の反応を見ながら話すスピードを調節しよう。

板書だけでは限界があるので、プリントを配布したり、PowerPoint や OHP を利用しよう。

(安田 豊、瀬尾 美鈴)



3 学生の参加を促そう

(1) 学生とコミュニケーションをとろう

葵 : 堀川先生、学生が授業中携帯電話でメールしてますよね。周りに迷惑はかけてませんが、明らかに私の話を聞いていないですよ。それでいて、授業がわかりにくいとか言ってくるんです。

堀川 : 携帯メールな。あれはあかんね。授業中の携帯は絶対禁止にすべきやね。大体メールなんてするから、最近の学生は人とのコミュニケーションがうまくとれないんや。

北山 : 堀川先生、学生とコミュニケーションをとるために、携帯メールを利用している先生もいるみたいですよ。それにメールは今や必需品と違いますか。携帯はともかく、パソコンメールで会話することで、学生とコミュニケーションを図るのは悪くないと思いますよ。

葵 : わたしもパソコンのメールは、利用していますし、ゼミのホームページがあるので、掲示板も利用しています。掲示板を利用すると、教員と学生のコミュニケーションだけではなく、学生同士のコミュニケーションもとれるんです。でも授業中の携帯メールはどうかしら。出欠の確認を携帯メールでしている先生もおられるようですが、わたしはどうかと思います。

北山 : 携帯メールはいろいろ問題がありますね。でも掲示板はいいアイデアなんとちゃいますか。学生とのコミュニケーションをとる新しい手段の一つかもしれませんね。それと、葵先生、学生とのコミュニケーションをとるには、まず、学生の名前を覚えることが先決ですよ。学生は先生が自分の名前を覚えていると、うれしいんですよ。

葵 : そういえば、「えーっ！先生、わたしの名前覚えててくれたんや、うれしいわあ」って、先週のゼミで言われました。

堀川：うーん。学生とのコミュニケーションは、いろいろな手段があるし、またクラスの規模なんかも関係してくるとわしは思うな。大教室では、学生の名前を覚えるのは絶対無理やなあ。わしの場合は、大きな教室では、室内を巡回し、学生に声をかけるようにしているが、大教室では、それぐらいしかできひんと思うわ。

北山：確かに、大教室では、難しいかもしれませんね。堀川先生、大教室で学生とコミュニケーションを図る方法として、ぼくの場合は、毎回学生にアンケート用紙のようなものを配って、その日の授業で、わかりやすかったところと、わかりにくかったところを書かせるようにしています。もしわかりにくいところがあったら、次の授業の冒頭で、別の角度から、前回の授業の復習をしています。

堀川：それなら、わしもやってるけど、わしの場合は、係りの学生を3人ほど決めて、その3人に、その日の授業の評価を書いてもらい、参考にしているよ。

葵：堀川先生、先生のように、信頼できる学生に絞ってもいいかもしれませんわ。同じ意見が多数あるかとも思いますし。

北山：葵先生、学生と旅行に行くのも学生とのコミュニケーションをとるいい方法やと思いますよ。実際の会話だけがコミュニケーションであるわけではない。お互いの感情のコミュニケーションも重要やと思います。われわれ教員も人間です。ひとりの人間として学生と関わることが求められているんじゃないかと思います。それに学生に計画を立てさせれば、自主性や連帯感、あるいは協調性も養えますよ。

堀川：わしはたまに「ラウンジふるさと」でコーヒーを飲みながら、学生と世間話をするんじゃが、最近雑務が多くて、以前のように、学生とコミュニケーションをとる時間が削られとるわ。

北山：確かにそうですね。ぼくがこの大学に来た10年前とは様変わりで

すよ。最近では雑務だけじゃなくて、やたらと授業も増えているんじゃないですか。学生とコミュニケーションをとる時間の余裕がほしいですよ。

葵 :ところで、北山先生、なんかゼミの学生が、神山祭(学園祭)に模擬店を出そうと計画しているみたいで、それも面白そうだと思っているんですが。

北山 :それもいいですね。コンパをしたり、学園祭に参加したりして、学生と過ごす時間を増やすことによって、お互いの信頼性も確保できるし、また対話しやすい雰囲気作りもでき、普段の授業がやりやすくなりますよ。オフィスパワーといって、一定の時間を学生との対話の時間にあてるなんてことをやっている先生方もおられるようです。われわれと会話をしたがっている学生って、意外とたくさんいるんですよ。学生は、将来の職業、学校の勉強、アルバイトとか、いろいろな悩みを抱えています。ぼくらができることは限られてますけど、教員は、学生に対する良い助言者であるべきやとぼくはいつも思ってます。

葵 :わたしも学生と仲良くなりたいと思っていますんです。神山祭に参加してみますわ。学園祭で着る、ゼミのトレーナーを作ろうと思っているんですが、先生もどうですかって、学生に言われてるんです。作っちゃおうかな。

堀川 :なるほどな、それは確かに面白いな。

(2) 私語に対処しよう

葵 :今日の午後のクラス、1年生の大講義なんですけど、毎回うるさくて本当に困ってるんです。堀川先生のように、学問的に確立したものが無いから、学生がわたしのこと甘く見てくれると思うんですけど、先日なんか、授業が終わった後に、真面目な学生から、「うるさく

て授業に集中できません、ラスト5分はまったく聞き取れませんでした」って言われてしまって……。いったいわたしはどうしたらいいんでしょう。

堀川：いやいや、わしだって、私語に関しては悩んでいますよ。あなたと一っしょや。本当に最近の学生はけしからん。先週のわしの講義でもあった、あった、始まってから、ずうっとわしの話をお聴かんと、話しとったやつがあったわ。しかも授業中なのに、帽子を被って、怒鳴って出ていかせたんだが。だいたい先週なんか暑い日だったし、何でこの暑いのに毛糸の帽子なんか被ってんのか、わしには理解できんかった。

北山：堀川先生、それはファッションですよ。テレビに出てくる歌手なんか、インタビューのときでも被ってますよ。

堀川：しかも、その学生は、学生証を出せって言うたら、逃げおって、わしは丸善まで走って追っかけたよ。

葵：捕まえたんですか。

堀川：もちろん！

北山：堀川先生、それはすごい、すごすぎますね。すごいバイタリティーですよ。でも、怒鳴って無理やり退出させるのは、強引過ぎませんか？

葵：うーん、確かにそうかもしれせんわ。それにきつく注意して退出させるというのは、堀川先生のようなご立派な先生だからできる方法だわ。わたしでは無理だと思います。だいたい、わたしが怒っても、たぶん学生はさっぱり言うことを聞いてくれないような気がします。

北山：それに、怒鳴って無理やり退出させると、クラスの雰囲気が悪くならないかな。ぼくはあまり度が過ぎる場合には、私語をする学生のそばまで行って、マイクを使って授業するようにしていますけど。

他にもいろいろな方法があるとちやいますか。先日の本学のアンケートによると、私語をする学生には、「他の勉強したい学生の時間を奪っているんですよ」って、説教する先生もいるようですね。

葵 : そういえば、静かにするように注意して、それでも静かにならない場合には、教卓の前に座らせるなんていうのもありましたし、注意することにイエローカードを出し、3回出たら欠席扱いにするというのもありましたわ。

北山 : それとは、逆に、おもいきり話をさせるなんてのもいいんとちやいますか。学生は1週間ぶりに会った友達と話をしたいんですよ。だから、教室内で私語をしている学生に対して、教室の外で話すように促し、話が終わったら教室にもどってきなさいとかいうのもいいように思います。

葵 : だったら、最初の3分ぐらいおしゃべりタイムを設けるとか、あるいは授業の中間に休憩タイムをとって、学生に少しの間会話することを認めるなんてのも案外いいかもしれませんね。

北山 : 葵先生、いろんな方法があると思いますけど、ためにいくつか使ってみたらどうですか？ご自分に合う方法がきっと見つかると思いますよ。

堀川 : なるほどな。自分に合った方法が必要やな。確かに、イエローカードはわたしには合わへんが、休憩タイムは、ありがたいな。わたしにも^あ合うとるわ。

(小池 和彰)



(3) グループ学習をしよう

堀川: わしは大学における教育には2つの目的があると思うんや。まず1つは壇上から真理を伝えること。もう1つは、真理に至るためのプロセスを実地に学ばせることや。どや、北山君、こんなんや。

北山: 確かにお説の通りやと思います。

堀川: しかし、そのプロセスを教えるのは難しいんやな、これが。

葵: そうですね。学生が研究者を目指すなら、どんどん文献を読ませたり、フィールドワークさせたりして、個別の研究指導もできるんでしょけど、すべての学生にそれを強制したら、みんな逃げちゃうかも。

北山: 楽しく、しかも学問のやりかたを学ぶということであれば、グルー

プ学習が有効や。ゼミでの勉強がまさにそれやと思います。

堀川：そりゃわかる、わかるなあ。わかるんやけどなあ、わしもゼミを受け持ってるんやけど、ちいとも盛り上がりませんなあ。学生から意見も質問も出ないから、結局、毎度、わし一人でしゃべってるわ。

北山：先生の話は面白いから、みな聞きほれてるんとちゃいます？

葵：北山先生、わたしのゼミでも学生たちの発言は少ないです。

北山：ぼくもゼミを受け持っていますけど、20名もいるせいか、みんな遠慮してはじめはなかなか意見がでえへんかったんです。でも、6、7名のグループを3つ作り、グループ単位で調べ物をさせたり、報告をさせたりしたら、活気が出てきました。先日は、講義科目でもグループ毎に討論させたら、うるさいくらいに議論が盛り上がりましたよ。

葵：そっかあ。学生にとっては5名から10名くらいの規模で勉強させると一番気合が入るのかもしれないね。

堀川：そうかなあ。わしはそうは思わんけどなあ。この頃の学生はアルバイトで忙しそうやし、集団行動も苦手やと思うよ。授業時間以外に集まって、ちゃんと勉強するとは思えへんけど。

葵：堀川先生、それが、結構やるこたちもいるんですよ。図書館の研究個室を覗くと、遅くまで勉強会をしている学生たちのグループをたまに見かけます。

北山：そうですね。ああいう和気藹々とした雰囲気勉強するのはなかなか楽しいんとちゃいます？ぼくのゼミでも、グループを作ると、案外、何枚もレジュメを作って配布したり、模造紙に地図をかいで発表したり、結構張り切って報告してくれますよ。

堀川：それは感心やなあ。折角それだけ調べたんなら、その成果を残せるように配慮してやったら、学生も喜ぶかもしれへんね。

葵：そうですね。この頃はパソコンも普及して、本職顔負けのパブリ

ッシングも可能になったでしょ。学生たちのまとめたものを冊子に綴じてあげるとか、図書館の一角にコーナーを設けて、ほかの学生たちも読めるようにするとか工夫したら面白そうですね。

堀川：葵先生、それはどうかなあ。図書館は今でも狭いのに、コーナーを作るなんて難しいんじゃないかな？でもまあ冊子に綴じるのは面白いかもしれへん。学問の喜びは、むろん真理を発見することにもあるが、それを発表して、広く人々に知ってもらおうということにもあるんじゃないかな。

北山：たとえば、そのグループ学習のテーマが地域社会のニーズに沿うようなものなら、新聞に報道してもらってもいいんじゃないですか？それは社会にとっても有用やし、学生たちの研究意欲を刺激するんじゃないかな？

葵：それと、その研究成果が認められたら、学生たちは大きな達成感が得られて、きっと社会に出てからも自信になると思いますわ。

(河原地 英武)

(4) ディスカッションしよう

(秋学期の初日、教員控室にて)

北山：あっ、堀川先生、おはようございます。今日から新学期ですねえ。結局この夏休みも何やかんやで忙しくて、あっという間に終わりですわあ。

堀川：うーん、毎年のことながら、この時期になったら頭が痛いわ。2カ月も授業やってへんと、ペースを取り戻すまでたいへんやね。わしも登校拒否になるわ。

北山：先生みたいなベテラン教員でもですか？

堀川：あったぼうよ(なぜか関東弁になる堀川先生)。特にこの秋学期は2年生の新しいゼミが始まるんで、そのゼミをどうやって運営し

ていこうか、毎年頭を悩ませるわ。あんたはそんなことない？

北山：確かにそうですね。ぼくの授業は基本的にディスカッションを積極的に取り入れています。受身の学習は今の学生には不向きですよ。能動的学習をさせんと。能動的に学習させるには、学生を参加させること、それにはディスカッションが最適やとぼくは思います。

葵：うちのゼミの学生、なかなか発言してくれなくて、わたしはいつも困っているんです。北山先生のゼミの学生さんは、たくさん発言されるんですか？

北山：まず、雰囲気作りが重要やと思います。お互いよく知っている間柄やったら、議論もやりやすいんじゃないかと思います。それに、われわれが学生の名前を覚えるのはもちろん重要ですが、学生同士が名前を覚えることもまた重要やと思います。英会話の授業なんかで行われているように、学生の名札を衣服に貼らしたり、あるいは机の上に明示するなんて方法もあります。あーそれと、葵先生、人前で話をする恐怖心のようなものも発言が少ない理由なんとちゃうかな？

葵：北山先生、だれでも失敗するのは怖いですし、アホだと思われたらどうしょうって思いますよね。わたしは発言がぜんぜんないと、指名して答えさせたりしているんですけど、それでも意見が出ないと、「みんなどうしたのよ。テンポよく議論しましょよ」って言うんですけど、どうも...

北山：意見・質問を聞いても何も出ない場合には、より答えやすい質問に変えたり、学生の関心のある質問に変えたりすることが必要やと思います。それと指名すると、それが教室の暗黙のルールとなってしまうと、当てられない限り答えない雰囲気がクラスにできてしまうんです。また、学生の恐怖心を取り除くために、学生が発

言したら褒めてやるのが重要やと思います。それがたとえ的外れの答えやとしてもね。

堀川：ただ、あとは内容の問題もあるとちゃうかな。気軽に意見は出し合えても、しょうもない意見ばかりではあかん。

葵：そこで教員の舵取りが必要になってくる…。

北山：そうですね。学生のことやから、話が本質からずれて、瑣末な議論になる場合もありますし、その時、教員がうまく介入することが必要やと思います。

葵：瑣末な議論展開になって、それが笑いを誘うこともあって、ときにはそれも楽しいですけど、瑣末な議論に終始したら教育効果はないですものね。

堀川：葵先生、思い切って、ディベート形式の授業なんかもいいんちゃうかな？

葵：ディベートですか？

堀川：実は、わしのゼミでも時々やってるんやわ。ある争点に関して肯定側と否定側に分けて、それぞれのグループに事前に準備してもらい、ゼミの時間に、双方の意見を闘わせるんや。わしが審判になり、勝ち負けを一応決めてるんや。学生たちはもっともっと議論できるようにならないといけない。たとえば、わしのゼミでは、つぎのような手順で行ってるんや。

- ▶ 肯定側立論(5分)
- 否定側 肯定側: 反対尋問(3分)
- 否定側立論(5分)
- 肯定側 否定側: 反対尋問(3分)
- 作戦タイム(15分)
- 再度議論(15分)
- 肯定側要約(2分)
- 否定側要約(2分)
- 判定(3分)

葵 :堀川先生、そうですね。社会に出たら学生はディベート能力がなかったら、いけませんね。わたしも学生のディベート能力を向上させたいです。

北山:葵先生、でもディベートは、「相手を口でいい負かす術」とはちゃいますよ。違う立場に立って物事を見ると、客観的に物事を見ることができるようになったり、異なる意見に対する寛容性や柔軟な思考を得ることができるようになったりするもので、そのために行うものですよ。このような能力が高まれば、実社会においても、多角的な視点で問題を検討し解決することができるようになると思えます。

堀川:確かに、勝ち負けが重要なんとちゃうなあ。肯定側・否定側の議論を通じて、争点が明確になったり、メリット・デメリットが浮かび上がってくることになる、それがディベートのいいところや。学生はそこから多くのことを学べるんじゃないかな。そやなあ、最初は、必ずしも、専門領域にこだわらなくてもいいんとちゃうかな。

北山:そうですね。でも、議論の種類として、「事実に関する論題」、「価値に関する論題」、「政策に関する論題」などがありますが、このうち、「事実に関する論題」はあまりお勧めではないです。たとえば、事実に関する論題には、シェイクスピアは誰だったかとか、価値に関する論題だと安楽死の是非とか、政策に関する論題だと、消費税の税率を上げるべきかどうかなどがあって、事実に関するディベートというのは、調べれば答えが出るはずのものなんやけど、データの有無と解釈が重要になって、授業で取り上げるのはかえって難しいし、適切ではないんじゃないかなとぼくは思ってます。

葵 :なるほど。そういえば、シェイクスピアに関しては、いろいろな説があるって TV 番組で見ましたわ。ある個人がシェイクスピアだって説もありますけど、シェイクスピアはグループだったって説もある

んですよ。

堀川：日本の東洲齋写楽の話と似とるね。確か写楽も版元の蔦屋が作ったグループだったとかいう話を小説で読んだことがあるわ。実際は絶対あるはずやけど、確かに調べてもはっきりした証拠がみつかりそうもなさそうやし、水掛け論になりそうやね。

北川：どうせなら、このディベートを、ゼミの枠を越えてやってみるなんてのはどうかな。たとえば、1学部、いや、他学部を交えてもいいinchゅうかな。いろんなゼミの間でディベートをするんですよ。何か共通のテーマを決めて、ゼミ対抗のディベート合戦をやるなんてのも楽しそうなんとちゃいますか？

葵：名案かもしれませんわ。全学部ワンキャンパスが本学の持ち味ですもの。法学部と経済学部の学生、文化学部と経営学部の学生が、ゼミを通じて時々交流し合う。それは学生にとってもいい刺激になるんじゃないですか。ま、いずれにしても元気な女性が活躍するとわたしは思いますけど。

北川：おしゃべりは確かに女性の方が上やけど、ディベートになると、多くのゼミでは男子学生のほうが強いですけどね。

葵：そうかしら。わたしのゼミでは女子学生のほうが強いですから、わからないと思いますわ。

堀川：ちょっと待てよ、思いつきでいうなよ。若い人はせっかちやなあ。同じ学部でも議論が噛み合わへんのにやなあ、学部がちごうたら、もっと噛み合わんのとちゃうかな。それに、ディベートは勝ち負けが重要なんとちゃうよ。

▶ 授業改善のヒント

学生の名前を覚えよう。

怒鳴るとクラスの雰囲気が悪くなるので、私語対策は授業の合間におしゃべりタイムをもうけるなどの別の方法にトライしよう。

楽しいグループ学習にチャレンジしよう。

ディベートは、相手を口で言い負かす術とは違う。

意見・質問をとっても意見が出ない場合には、より答えやすい質問に変えたり、学生の関心のある質問に変えよう。

学生が発言したら褒めよう。

(井奥 成彦)



4 授業時間外の学習をさせよう

(1) 予習・復習をしよう

堀川：最近の学生は、学問に対する意欲がちゅうもんがない。先週授業で説明したところがまるでわかってへん。

葵：やはり宿題や課題を課した方がいいのかしら。

北山：ぼくは、予習のための文献をあらかじめ渡したり、紹介したりしてるんやけど、葵先生なら、先生ご自身のホームページに予習のための文献とかを載せるって手もあると思いますよ。

堀川：ちょっと、待ってくれよ。予習だけではあかんよ、復習もせんと。

北山：そうですね。ぼくは毎回小テストを実施していますよ。そうすると、前回の授業の復習を学生は是が非でもやらなあかんし、毎回の授業に緊張感も生まれます。

堀川：わしはパソコンは苦手やなあ。

北山：それなら、堀川先生、オフィスアワーとか個人面談って手もありますよ。

(2) レポートを書かせよう

葵：堀川先生、学生にレポートを書かせてみたんですけど、誤字・脱字が多くて、その上、読書感想文みたいなものがかかりあって困っているんです。

堀川：最近の学生は本をあんまり読まんからなあ。わしも困っとるわ。

北山：葵先生、レポートとは何か、ある程度われわれが教える必要がありますよ。書き方について注意点を詳細に書いたプリントを配布するんです。そして、フィードバックすることが必要です。だれだって最初からよいものは書けへんですよ。受け取ったレポートに先生が感想なり、コメントをつけて、学生に返す必要があるように

思います。学生はそれを見て、今回は、今回よりも良いものを書くでしょう。先生から何らかのコメントがあれば、学生は喜ぶんじゃないかな、きっと。ああそういえば、先生はパソコンが得意ですから、メールなんか利用してもいいと思いますよ。

葵 : そうですね。メール添付形式で受け取れば、その後の修正や再提出も簡単になりますわ。

北山 : その修正されたレポートを模範答案としてゼミのWebページに掲載すれば、ゼミ生みんなの参考になるかもしれへんし。

堀川 : そうやな。でも著作権の問題を気いつけなあかんよ。北山君、わし言うとかよ、それは。

(3) 個人およびグループの発表の準備をしよう

葵 : 北山先生、グループ学習ってされたことありますか？

北山 : もちろんやってますよ。ぼくのゼミでは、ぼくがテーマを与えて、文献を紹介して、図書館のグループ談話室で事前に準備させています。

堀川 : んーでもな、北山君、グループ学習は問題もあるから注意せなあかん。グループにすると、怠ける学生は怠ける。いつも任される学生は決まってくるとわし思うわ。

葵 : なるほど、さすが堀川先生。確かに、グループ学習には、そういう問題も考えられますわ。それに評価の問題もありますね。いつもグループだと、評価が大変になるかもしれませぬ。

▶ 授業改善のヒント

予習のための文献を紹介しよう。

復習のために小テストをしよう。

レポートの書き方を教えよう。

学生にコメントをつけてレポートを返そう。

グループ学習をすると怠ける学生が出てくるので注意が必要。

(小池 和彰、卯野 優)



S. Saeki

5 成績評価をしよう

(1) 成績評価の基本原則とは

葵 : 堀川先生、成績評価については、どのような点に気をつけるべきでしょうか？

堀川 : 昔からいろんな伝説や噂がはびこってきた分野やなあ。

葵 : 先生はどうされているんですか？

堀川 : わしか？ わしは、ほれ、古典的なやり方や、階段の一番上からバートと答案を放ってやな、遠くに飛んだ順に点をつけていってゆうやつ。

葵 : ええっ、本当にそんなことなってるんですか？

堀川 : はははっ、ジョークに決まっとるやろ。ただな、できは悪うても「美味しいカレーの作り方」をキチンと書いてきた答案には、つい合格点を…。

北山 : 堀川先生！

堀川 : いや、すまんすまん。

葵 : でも、私の学生時代にもそういう話ありましたよ。「あの先生は答案を扇風機で飛ばして、飛んだ順に点をつけてる」とか「一升瓶持って挨拶に行ったら、いつの間にか合格してた」というのが。

北山 : まあ、そういう噂は大昔からずっとあるもので、都市伝説みたいなもんやね。実際には、そんなことをしている先生はいませんよ。むしろ、そうした都市伝説めいたものが語られるということ自体が、従来の大学における成績評価のあり方をよく示しているんじゃないかと思います。

葵 : っていうと？

北山 : うん、都市伝説や噂っていうのは、ある事柄について人々の関心が高いにもかかわらず、その実態がよくわからないときに生まれる

ものなんや。

葵 : つまり、これまで成績評価っていうのは、大学教育のなかで学生の関心はすごく高いのに、学生から見て実態のよくわからない部分であったと？

北山 : うん、答案も返ってこないし、正答もはっきりとはわからないし、解答のポイントや採点基準などの詳しい説明もないし、高校までの試験に比べて、あまりにおおざっぱなのに驚いた経験は誰にでもあるんちゃうかな？

堀川 : そして変なウワサだけはいろいろ流れると。

北山 : そうそう。だから、これから大事なのは、この不透明な部分をいかに透明化していくか、ということになるんやと思います。

葵 : なるほど、具体的に言うとうなるんでしょう？

北山 : なにより重要なのは、公平で一貫した原則のもとで評価を行う、ということやと思います。そしてそれを学生に対してキチンと説明する。たとえば、自分の担当する授業の内容・目的はどのようなもので、そのためにどういう評価方法を選択するかということを学生にあらかじめキチンと告知するんです。評価に当たっては厳格・公正に評価を行う。もちろんえこひいきや、私情による評価はもってのほかです。

葵 : ああ、わかります。

北山 : また、具体的な基準はどのようなものか、たとえば出席30%、授業態度20%、筆記試験50%を合算して評価する、といったことも告知しておくとは学生は安心するんやないかと思います。そして、こうした点は、授業計画を立案するときに一緒に考えて、シラバスなどに明記すべきやとぼくは思います。

葵 : つまり、成績評価についてもできるだけ、あらかじめ情報を提供するというわけですね。

北山: そうやね。要するにできるだけ制度的にも透明度を増そうということなんや。

(2) 成績評価の実際

葵 : 基本的な考え方はよくわかりました。では、具体的に成績評価のやり方にはどのようなものがありますか？

北山: 実践例としては、いろいろ興味深いやり方がある思いますよ。さっきも言ったように、1回の期末試験だけで評価するというやり方だけではなく、出席・小テスト・レポートなどを取り入れることも可能やと思います。実際、多くの先生方が、そのような試みをなさっています。

堀川: ほほーっ、皆さん熱心やねえ。

葵 : 堀川先生！

北山: いやいや、そら本当にすごいもんですよ。先生方を対象に行ったアンケートから、具体例をいくつか紹介しますと、第1の例。学生をレポート希望者と期末の筆記試験希望者に分ける。レポートは授業を通じて4回ほど出させ(1回25点)、その都度添削して返却する。この例は、なにより学生に自分で成績評価の方法を選ばせるという点が面白いと思います。

葵 : 学生の自主性を引き出すきっかけになりそうですね。レポートを添削してくれるのも、学生には勉強になるし、嬉しい対応ではないでしょうか。

北山: 第2の例。授業で毎時間、重要ポイント2点ほどに絞ってクイズを出し、点数に加算する。出席点ではないので、授業に出ていても誤答すれば0点であることを徹底させる。その結果、大クラスの出席率は、平均76%、合格率も70%前後に向上した。また学生の理解度がリアルタイムで把握でき、次の授業でフォローアップすることもできる。

葵 :このやり方は、クイズという形式が学生の興味を引くだろうし、授業に出席するモチベーションになりやすそう。

北山:第3の例。成績評価の対象となる事項を明らかにし、学生自身に自己評価させる。学生評価と教員の評価との相関関係を求め、歪みの大きい事例を点検する。そのうえで、成績の補正を行い、秀・優・良・可の割合を点検し、必要があれば再補正をして、最終的な成績とする。

葵 :はーっ、すごいですね！。

北山:確かにこれはすごい。手間はかかるやろけど、学生自身にも自己評価させて、それを教員の評価と突き合わすんやから、学生自身にも勉強になるし、教員にも自分の授業がうまく理解されているかどうかよくわかるんやないかと思う。

葵 :本当にいろいろ工夫されている先生がおられるんですね。

堀川:わしとはえらい違いやなあ。

北山:堀川先生はちゃんとしておられるとは思いますが、確かにどれもものすごく工夫されていて、本当に頭が下がります。共通しているのは、学生の自主性をうまく引き出して、授業に参加するモチベーションを高めるきっかけとしても成績評価を用いておられる点ですわ。

葵 :それに、成績評価を通じて学生とコミュニケーションしようという姿勢が根底に感じられますよね。

北山:うん。手間のかかる手法は大講義などでは使用しづらいかもしれへんけど、いろいろ工夫して、ぜひその姿勢を少しでも取り入れるべきやとぼくは思います。

堀川:ほんまに脱帽や。

北山:他にわりとオーソドックスな感じものとしては、こんなのがあります。たとえば、「毎回出席をとり、出席1回を1点にカウントする。レポ

ートを課した場合は1回につき5点にカウントし、試験の点数は残りの点数で考慮する」とか、「筆記試験では、試験後、配点・解答例・採点のポイントを掲示する。また、あと少しだけ合格点に達しない4年生に対しては、レポートの課題を出している」など。また「純粋に学力のみで評価。出席・学年などはいっさい考慮しない」とされている先生もおられるみたいです。

堀川：ほー。

北山：いずれにしても、全体的に学生が理解できる評価体系を作り、それを明示する、ということは共通しています。学生とのコミュニケーションの一環として成績評価を位置づけるうえで、この点が一番重要なんやないかと思います。

葵：なるほど、それがさっきおっしゃった評価の透明化、ということなんですね。

堀川：確かに、どれもすばらしいもんやなあ。けど、そんなにおおげさに考えんでも、昔のやり方で十分なんとちゃうやろか。学生だって自分で勉強しよるでしよ。

北山：ええ、当然、そういう意見もあるんやないかと思います。ただ昔とは学生の気質が変わってしまって、教養主義的なやり方を取りづらい面もあるんやないですか。それにあとよく言われるのは、暗記偏重の一般的風潮との関連で、1回きりの筆記試験やマークシート試験では、場合によっては単なる暗記競争になってしまう、ということですね。

堀川：うん、確かにあれは困りもんではある。

北山：この点では、独創性や創造性、あるいは授業のなかでの努力の度合いなど、暗記能力以外の多様な能力も評価できるよう、教員のほうもいろいろ工夫する必要があるんやないかと思います。まあ、いずれにせよ、「これが一番正しい」というやり方が決まってい

るわけではないですし、どのやり方にも当然、一長一短があるや
るから、結局は、自分に合ったより良い方法を模索し続けることが
重要なんやと思いますよ。

葵 : ただしその場合にできるだけ不透明な部分を減らして、学生の側
が納得しやすい方式を考えるのが大事、というわけですね。

堀川 : けどなあ、実際のところ大講義なんかであればこれもとやると、あ
まりに作業が膨大で結局パンクしてまうんちゃう？

北山 : ええ、コストの面も当然考えなあかんですね。ティーチング・アシ
スタントをうまく活用するなど、さらにいろいろな工夫を積み重ね
る必要があるんやないかと思います。

(3) 成績評価で気をつけるべきこと

葵 : 他に何か考えておくべきことはありますか？

北山 : うん、成績っていうものが結局、誰のため・何のために存在するか、
ちゅうことも一度は考えておかなあかんと思いますよ。

堀川 : ほほう、なんや哲学的な話になってきたな。今までやったら、教
員が学生を評価するための手段ということで十分やったろうけど、
それではあかん？

北山 : ええ、単純に論ずることは難しいですけど、たとえば、成績評価
が評価のための評価になってしまって、学生のやる気を殺ぐよう
なものになってしまったら、それはやっぱり良くないんちゃうかな
って思うんですよ。試験やレポートは学生を脅すための道具やな
いですからね。むしろ、それを受けることで学生自身にもプラスに
なるような、いわば学習の一環としての性格も持つものでなけれ
ばあかんと思います。

葵 : つまり授業の理解を深めるのに役立ったり、学生の知的好奇心
を育むような役割も持つべきだ、ってことですか？

堀川:知的好奇心！ええ言葉や。

北山:はい、評価といっても別に学生を裁くわけやないですからね。やはり学生の糧になる面があった方がいいんじゃないかな。たとえば、筆記試験を行う場合に、事前に幾つかテーマを出して、あらかじめ学生にいろいろと調べさせておいたうえで、試験の時間にそれをまとめさせるようなことも、考えられると思うんです。あるいは、上の実践例にあったように、なんらかのかたちで学生自身も評価にかかわらせるなら、それは学生自身にとっても自己確認の有益な機会になるかもしれへんし。

葵:なるほど。確かに、それなら学生にとってもすごくやる気が出ますよね。さっきの自主性を引き出すという話ともつながってきますし。どうやら、まだまだ教員の側にもいろいろ工夫の余地がありそうですね！

堀川:ほんまやな。かわいい学生たちのためや、教員も手間は惜しまず、学生を育てるため試験にもエネルギーを注げ、ちゅうことやね。

葵:ところで、少し話がずれるかもしれませんが、こうして見てくると、成績評価というのは、教員の授業のあり方そのものと密接に結びついているように感じられます。教員のほうも、自分が担当した講義のあり方を常に反省しながら、それに合致した評価方法を考える必要があるというか。

北山:うん、そうやね。成績評価というものは、教員にとっては、自分の授業全体の総仕上げとして、授業の目的や計画が効果的に達成されたかどうかを判断する材料にもなりますし。そやから、試験で評価されるのは本当は教員自身なのだ、という言い方もできるんじゃないかな。

葵:なんだか成績評価って奥が深いんですね。大変そうですけど、教員の側の腕の見せ所みたいなのところもあって、いろんな可能性

を感じます。私もいろいろと工夫してみたいと思います！

▶ 授業改善のヒント

公平で一貫した成績評価をしよう。
学生のやる気・自主性を引き出すような試験方法を工夫しよう。
筆記試験やマークシートだけでなく、独創性や創造性、授業への積極的参加など、多様な能力を考慮した成績評価を工夫しよう。
学生にもプラスになるような成績評価をしよう。

(耳野 健二)

成績評価—お互いに複雑な思い



6 多様な受講生に配慮しよう

(その日の講義の後、葵は自販機の前で一人でコーヒーを飲んでいて、時折、両手の間の紙コップをぼやっと見つめる。そこへ、元気滌刺の堀川と北山がやってきた。)

堀川: おやおや、葵先生、どうしたんや? ぼっとしてんで。

葵 : さっき授業をやってきたんですけど、できる学生とそうでない学生の差が激しくて…。

北山: 一方で物足りなく思っている連中がおるが、他方、反対に消化不良な連中がおるってことやね。

葵 : そうです。堀川先生なら、どの辺にレベルを合わせて授業されるのですか?

堀川: わしか、わしは大体、上の下といったところやね。それでも物足りない学生もあるだろうから、そういうときには問題点を見つけて積極的に質問せえと“喝”を入れるんや。逆に、理解できない学生にはわからんところを聞けと言うとるわ。

北山: でも、質問ってすぐに出ますか? ぼくは、もっぱら電子メールやオフィスアワーで対応しとるんです。それと、学生がいつでも自分のペースで勉強できるように教材を電子化してWebにおいたりしています。堀川先生はどうされているんですか?

堀川: うん。研究室での質問は歓迎するんやけど、電子物はわしはどーも苦手や。わしの場合はもっぱら講義中に質問させとる。講義の途中で小休止を入れて、考える時間というか、緊張をほぐす時間を設けてるんや。すると気持ちもほぐれるんやろな、いい質問も出るで。

葵 : すごいですね。わたしごときがそんなことしたら、教室はお祭りになりますわ。さすがです!!

北山: まあ、そこの所は、葵先生はまだお若いからなあ。ぼくも、意欲のある学生には、自主ゼミとか勉強会を開くように勧めています。時間のあるときには、ぼくも覗きにいくんやけど、結構頑張っているみたいですよ。

堀川: それはたいしたもんや、北山君。わしも、書物や雑誌記事などを紹介したりしとるで。

北山: そうか！ それもいいなあ。

(話が弾むと、本題から離れることはよくある。言いたいことを、手を替え品を替え披露し合うことになる。しかし、今回は初めから違う方向に進んでいたらしい。)

葵 : 実は、まことに申し上げにくいんですが、先生方が話題にされているのは、講義科目ですよ。今私がやってきたのは実習形式の科目なんです。でも、今のお話は、それはそれで参考になりましたけど。

堀川: ああ、そうやったの？ じゃあ、教室の規模も中・小規模やね。それなら、複数の課題を出す、これしかないんやないかな？

葵 : やはりそうですか。

北山: いやいや、そればかりってわけではないんやないかな。グループ学習という手があるやん。グループを組ませて、その中で早く課題ができたメンバーに、手間取っているメンバーの支援をしてもらうんや。

葵 : なるほど。互いに教え合うことで、どちらも得るものは大きいでしょうね。特に、しんどい学生にしてみたら、自分に近い立場の者から教えてもらう方が、問題意識や発想の仕方が似ていて、理解しやすい場合もあるでしょうね。

北山: そうやね。それに、早く課題ができた学生にもメリットはある。暇に

ならへんし、しかも授業活動の中での自分の役割というか、存在意義を感じることができると思いますよ。

葵 : 参考にさせていただけることばかりで、勉強になりました。ところで、もう一つお伺いしたいのですが、次のセメスターで大教室の講義があるんですけど、そのときのために、何か心得ておくようなことってありますでしょうか？

堀川 : 葵先生の言いたいことは、きっといろいろな学生がいるということやろうな。できる学生とできない学生だけじゃなくて、求めるものもハイレベルな学生から、単位だけが必要な学生、積極的なことから消極的なまで、本当に様々あるなあ。

葵 : わかってはいるんですが、どう対処したらいいんでしょう。

北山 : ぼくは早い時期にアンケートをとって、受講生全体の傾向を把握するようにしています。ぼくは字がへたやから、板書すべきことはレジュメにして配布するんやけど、それが勉強に役立っているか、量は適切かとか、話し方は適切か、早口でないか、授業の面白いところはどこか、面白くないところはどこか、使用している教科書はわかりやすいか、予習をして授業に臨んでいるか、授業以外でどんな勉強をしているか、勉強でどんな問題を抱えているかなどを、あらかじめ学生にアンケートで聞いとるんですわ。それで、授業のレベルの修正をしたり、話し方に気をつけたり、それまで気づけなかったことをある程度知ることができるんです。

堀川 : 北山君、質問カードを配って、授業の終わりに回収して、次の授業の冒頭で回答するという方法もあるよ。大教室で質問するには相当な勇気があるやろけど、学生の立場からすれば、質問カードなら気軽に書けるし、答えてもらって理解できれば授業に参加している実感も味わえるやろし、わしは面白いやり方やと思うよ。

葵 : 大教室でですか。質問が大変な量になりませんか？全部答えて

いたら授業が進まないでしょうし、取り上げられなければ、質問した学生は失望しませんか？

学生からの質問

質問がある人は配布用紙に書いて、出してください。来週、回答します。



次週の授業

今日は、最初に、先週の質問に回答します。



うー、沢山、質問を書いてくれた。丁寧に回答してやるぞ。



先生、あと5分しかありません。

じゃあ、これから、今日の本題に入ります。



北山：回答にルールを作って、最初に説明しておけばいいんとちゃいますか？回答時間は授業の進行の妨げにならないように、たとえば15分～20分とするとか。それと取り上げない質問は、意味がないのではなくて、個人的に回答するのが適当と判断したものやから、授業後に来てくれへんかとか、あらかじめ学生に言うときばいいように思います。

堀川：それほど勉強した方ではなかったわしが研究者を志すようになったのも、授業での質問が「堀川君、いい質問や」と褒められたり、質問しにいったら、大先生に、「そこまで勉強しているのなら、君、こんなものもあるから読んでみたまえ」とおだてられて、本を紹介してもらって、それを頭ひねって読んでいることに快感を覚えたことがきっかけやったなあ。

葵：教員の一言が学生のやる気を引き出すことがあるということですか。ということは、逆に、教員の一言が学生のやる気を失わせることもあるわけですね。気配りの足りない私などは、言葉に注意しないとイケませんね。授業をするのが不安になってきました！

北山：大教室の授業で、初めから終わりまで全員に意味のある話をするというのは理想やろうけど、実際には無理やろね。学生に90分間緊張を持続して授業に集中しろちゅうのも酷や。全員に理解してほしい必要最低限の範囲を明示して、これに届いていない学生はどうすべきかを示して、これは自分を対象に話しているんやなと理解させる。勉強の進んでいる学生には、こんな問題もあるんやけど、どう解決すべきかといったステップアップを促す。そんなメリハリの利いた授業ができればいいなとぼくは普段考えているんですけど、葵先生、どうですか？

葵：それで、少し気が楽になりました。ところで、もう一つ気になっていることがありまして、今度わたしの授業に留学生の受講生がい

るらしいのですが、初めての経験で、どんなことに注意したらいいんでしょうか。

堀川：一般的には、国際交流センターと連絡をとって、どんな問題が生じやすいか、どのような対応策があるか情報を収集するといいいんやないかな。留学生が抱える問題や、教員が注意すべきことについても、かなりの情報の蓄積があると思うんやけど。

北山：それと、個人的に、講義を聴いて理解できるか、ノートを取ることができるか、コンピュータは使えるか、日本語でレポートを書くことができるかなどについて、その留学生に話を聞くことも必要かもしれないよ。こちらが当たり前やと思ってることが、留学生にとっては意外やいうこともあるし。

葵：話を聞いてみて、日本人学生と同じ課題や試験には耐えられそうにないと思われる場合には、どう対処したらいいんでしょうか。

堀川：特別扱いをするということではないんやけど、たとえば、こちらが読める場合には、レポートは日本語でなくてもよいとしたり、課題を変更して特別の課題を与えたりすることは、許容範囲かもしれない。

北山：1年の留学経験しかないんですけど、自分自身を振り返ると、留学は、初めはやはり非常に不安やった。そんなときに、何か困ったことはないか、過去の留学生はこんなんやったけど、君は大丈夫かと聞いてくれる人がいて、その人にはほんま感謝しとるんです。その後は不安が解消されて少し自信というか余裕ができて、留学生活も楽しめるようになりました。

堀川：もう一つ注意するとしたら、留学生をその国の代表者のように考えないことやね。わしの経験でも、ときどき「日本からの留学生として、この問題についてどう考えるか」と聞かれて困ったことがあるわ。わしも「日本ではこうや」とか答えたりしてな。後で、あれはわ

しの考えやな、まずいなあ、誤解されたん違うかなとか落ち込んだことがあるわあ。

葵 :なるほど。つついやってしまいそうなことですね。留学生に限らず、いろんなバックグラウンドを持っている学生がいるわけですから、それを理解したうえで、“その学生を個人として尊重している”というメッセージを伝えることが重要ということですね。

▶ 授業改善のヒント

電子メールやオフィスアワーを用いて質問に答えよう。
グループ学習を用いて学生同士で教え合う体制を作ろう。
アンケートをとって、学生の理解度を把握しよう。
質問カードを使って、気軽に学生に質問させよう。
国際交流センターと連絡をとって留学生の情報を得よう。
いろいろなバックグラウンドを持つ学生に対して、「個人として尊重している」というメッセージを伝えよう。

(牛瀧 文宏、松原 久利)

7 公開授業をしよう

(某学部教員控室で)

葵 : 今日はおオープンキャンパスの日なんですね。わたし、すっかり忘れてまして、一番前の列に高校生が二人座ってて、一瞬目が点になりましたわ。制服のネクタイなんか締めて初々しかったけど。堀川先生のところは？

堀川 : どやったかな、わしのところはおらんかったと思うよ。講義のタイトルが難しすぎて、敬遠されたんとちゃうかな？前の学期の終わりに公開授業週間というのがあったんやけど、あのときは往生したわあ。同僚の先生が一人、他学部の先生が一人参観に来とって。なにせ自分の授業に自分の学生以外の人間が入るっっちゃうのは、長い教員生活でも初めてやったんで、わしも思いがけず緊張したわ。

葵 : わたし、専門学校で教えていたことがあるんで、教えるのがまるっきり初めてではないんですが、でも先生方に参観されるとなると、やっぱり緊張しました。学期末に近い時期でしたし、進度が予定より遅れていたこともあって、焦り気味で授業しちゃって。だから参観の先生が入って来られたときは思わず、「普段はこんなんじゃないのに…」 「もっと余裕があるときにきてよ」って思いました。

堀川 : ベテランでもおんなし(同じ)や。そういえば参観者が3人もいて、マイクを持つ手が震えたって言うてたんもおったで。でもあの、参観が終わったあと参観者からコメントもらうやろ、あれはまあまあよかったんとちゃうかな。日頃自分では気付かないところがやんわり指摘してあって、それなりに参考になったわ。まあ、「目の覚めるような指摘」はなかったけども。

葵 : 「やんわり」指摘するなんて、とんでもありませんでしたよ、わたし

の場合。なんていうか、「新任教員を監督してやる」みたいな調子で書かれていて。わたし思うんですけど、京産大の公開授業の問題点は、参観する側のスタンスがはっきりしてないことだと思うんです。

堀川：えっそれはどういう意味や？

葵：私の出身大学では、参観者は担当教員のピアと位置付けられていて、「ピアレビュー」っていうんですけど、同じ立場の人間として評価するっていうスタンスが徹底されてたんです。考え方としては、授業評価アンケートってありますよね。あのアンケートは、学生が教員の授業を評価するわけだから、ピアではないんですね。明らかに立場の違いってものがある。だから授業の評価を学生だけに任せるのではなく、同じ立場の教員としても行うべきだ、ってところから公開授業が始まったらしいんです。だから、同じ立場の、同じような課題を抱えた者同士がそうした課題について意見を述べ合う、っていうスタンスが伺えました。ただ、実際にやっている人たちは結構限られていて、教授法に関心のある若手の教員、って感じの先生方が多かったように思います。

堀川：なるほどな。学生による授業評価と公開授業での授業参観は互いに補完し合う関係にあるっっちゃうことか。おっ、これは北山君やないか、おつかれ。

葵：あら、北山先生、随分遅かったですわね。まあ、荷物がたくさん…。

北山：いやあ、今日はね、PowerPoint を使おうと思ったんやけど、万が一パソコンがうまくつながらなかったときのことを考えて、レジュメをたくさん準備しとって。

堀川：北山君、それは感心や！「教授法に関心のある若手の教員」の代表やな、君は。

北山:若手教員やなんて、ぼくの年齢知ってるやないですか…。でも何の話ですか、その「教授法云々」というのは。

葵:いま丁度、公開授業の話をしていたんです、堀川先生と私とで。教授法に関心のある教員って、そんなには多くないですよ、みたいな話をしてたんです。

北山:いえいえ、とんでもないです。この前の公開授業週間に対しても、随分と反響があったんちゃうかな。ぼくが知っているだけでも、「授業の進め方、雰囲気作り方が参考になった」「板書のコツが参考になった」「レジュメの作り方が参考になった」「大教室での授業の進め方に工夫がみられた」などの声を聞いてます。

堀川:それはまあ、初めてのことやったんで、そのくらいのことは誰だって学ぶもんちゃうかな。葵先生が言われるように、同じ仕事に携わり、同じような課題に直面してるもんが情報交換するのは、考えてみれば当たり前のことやで、そんなん特別のこととちゃうで。中学や高校の先生方はフツーにやってることや。

葵:そうすると問題はむしろ、公開授業週間のあいだしが、他の先生の教授法を学べないところにあるってことになりませんか。

北山:その「教授法」って言葉もちょっとひっかかるんやけど、それはいったん置いてくとして、ぼく自身もびっくりしたんやけど、アンケートの結果なんかを見ても、公開授業週間という風な特別の期間を設けるのはちごて、いつでもだれもがだれの授業を参観してもよい、という仕組みを作るべきやという声が意外と多いんですよ。つい1年前まで、公開授業なんて夢のまた夢やってぼくは思ってたのに…。

葵:それは、学内世論が大きく変わったってことかしら？

北山:社会的にみても、評価の文化が根付きつつあるのは確かやね。でもうちの場合、学内世論が変わったというより、もともと授業とい

うものは、公開授業週間という風な特別なかたちを取る必要がないとちゃうか、ふだんから公開されてしかるべきやないのか、と考えている教員が意外と多くて、そうした人たちの声が今回の取り組みをきっかけに顕在化してきたんやないやろか、とぼくは思ってます。

堀川：そうやね。そう言われてみると、今の時代、学生の中には社会人も留学生もおるわけやから、わしの講義に登録学生以外の人が紛れ込んで誰も不思議に思わんやろね。講義なんかは実質的に公開されてるようなもんかもしれへんな。

葵：でも、その一方で、授業の密室性というか、ある種のコミュニティ的感覚を重視していて、外部のまなざしが侵入してくる事態をなるべく避けたいと思うケースもあるのではないかしら。私も心情的にはそれに近いかもしれません。「外部の何かに邪魔されたくない」という気持ちといたらいいのでしょうか。ただ、おおっぴらには言いにくいですね、こういう意見は。「外部のまなざしが入ってきただけで崩れてしまうような授業でよいのか!？」って言われそうだし…。

北山：授業参観する側は、果して外部のまなざしを持ち込むことになるのかな？ 釈然としないところがあるんやけど、仮に外部のまなざしであるとして、そのまなざしによって露わになるのは、いったい何なんやろ。教員から学生に伝えられる情報のコンテンツなんやろか、伝えられる際のスキルなんやろか、あるいは両者の人間的な関係なんやろか、はたまた学生同士の関係を生み出しつつ、一定の時間と空間の中に展開される、授業というひとつの小宇宙みたいなものなんやろか…。

堀川：北山君、めずらしなあ、君にしては、話をややっこしくしすぎや。でも君の言いたいことはわかるで。わしの経験から言わせてもら

と、授業には情報内容とか技能に還元できない、教員のエートスとでも言わんとしゃあないものも含まれるんや。もし授業が情報内容に還元できるとしたら、授業に出ることと書物を読むことは同じことになるはずや。でも実際はちゃうやろね。学生は長い間教員とつき合う中で知らず知らずのうちにそうしたエートス的なものを体得していくんや。参観する者はそのところをわきまえる必要があるんと違うかな。1時間やそこいらで評価なんかできるかいな、そんなもん。

北山：なるほど、堀川先生、そうすると授業参観で評価されるべきは授業運営のスキルに限ったほうがいい、ということになるんやないかな。コンテンツはシラバスで公開されているし、達成度は期末試験やレポートで、満足度は授業の相互評価アンケートで評価されているんやから、そうすると、授業参観の意義は、授業のスキルを同僚として評価し合う、ということにあるんやないのかな？

葵：それはピアレビューっていう位置付けになるという話を、先生が来られる前にしてたんですよ。でもね、わたしは、授業参観の目的を「評価」に置くのは、戦略としてまずいと思うんです。授業参観を評価の仕組みの中に取り込むためには、公平性や透明性を保つためにさまざまな手続きが必要になってくる。でもそうなると、一部の熱心な教員のサークル活動みたいなことになってしまいかねない。でも、全員の参加がなければ評価の仕組みにはなりませんよね。ですからわたしとしては、授業参観の目的は当面、「授業運営スキルの共有」、ということにしたほうがいいと思うんです。評価に結びつけるかどうかは、もう少し考えた方がいいのではないかと思います。

北山：堀川先生、ぼくは葵先生と違って、「評価」という言葉にこだわりたいんです。公開授業を評価の仕組みの中に取り込むべきか否

かの議論は置いて、公開授業の目的を当面「スキルの共有」に置いたとしても、それはやはり広い意味での評価の一環としてやるべきやないか、教員の間互いに評価し合うような文化を育てることが肝心なんやないか、と思うんです。あーっ、しまった。もうこんな時間になってしもうてる。話の途中で申し訳ないんですが、これからぼく、学生と木屋町の「もたろう」でコンパなんです…。

堀川：北山君、君、昨日も確か木屋町の「ひいらぎ亭」やる、今日もかいな。

葵：あの、北山先生、さきほど「教授法」っていういい方が気になる、とおっしゃってましたが、

北山：葵先生、その話はまた今度や、いつも学生に遅刻はだめやいうてるし、ぼくも遅刻はあかんねん…。(と言い残して、足早に立ち去る。)

▶ 授業改善のヒント

授業参観の目的は授業運営スキルの共有にある。
授業参観は、将来的には教員の間で評価し合うような文化を育てることにつながる。

(鬼塚 哲郎)

第3章

授業の新しい試み



第3章 授業の新しい試み

1. 経済学教育における実験（ゲーム）の利用

経済学部 小田 秀典

科目名

入門セミナーA・入門セミナーB・3セメ基礎セミナー・演習 ・演習 ・演習
習 ・演習

授業の内容および特徴

経済学教育において実験（ゲーム）の教育への利用が少しずつ広がっている。実験の参加者は、熱心に取引を楽しんで「経済がよくわかった」と満足してくれる。

ところが、参加者が本当に教員の期待することを学んだとは限らない。たとえば参加者が売手と買手に分かれての市場実験でも、学生たちが「わかった」のは、教員が教えたい「ある一定の条件のもとでは、価格は需要と供給の釣り合う水準に近づくこと」とは限らない。多くの学生たちは、実験で価格が収束していったことだけが印象に残って「ある一定の条件」に気づかなかつたり、自分が儲けたり損をしたことだけが記憶に残って、「上手な取引の仕方」を勉強したと思ってしまう。もちろん、このような誤解を避けるために実験の後で解説をするのだが、学生たちは必ずしも実験と同じように真剣には説明を聴かない。学生たちは、実験装置のなかの動物がする学習だけで満足し、実験装置を設計シラットの行動を観察する科学者の考察を体験しない。

学生たちに実験の「内」で考えさせるだけではなく、実験「について」考えさせるためにはどうすればいいのか？この観点から、私は今、学生たちに実験に参加させるだけでなく実験を作らせる授業に取り組んで

いる。

3年間の試行錯誤を経て、いまは経済学部の1学期生から8学期生までの私の担当する全ての演習科目で、以下の要領で学生に実験を作らせる授業をしている。まず、最初の授業で、演習参加者(20-30名程度)を4つのグループに分け、各グループに教育用経済実験の論文・資料を与え(あるいは選ばせて)、実験の順番を決める。各実験グループは、順番に以下の手順で実験の準備・実施・報告を行う。

- 1 実験実施の1週間前までに、論文・資料を読んで理解する。
- 2 実験実施前の1週間で、実験を具体化する。すなわち実験を設計し、必要なもの(説明書、カード、記録用紙など)を作り、実験の手順と役割分担を決めて練習をする。
- 3 授業で、他のグループの学生たちを参加者にして実験をする。
- 4 翌週の授業までに、実験の結果を分析し、PowerPoint による口頭発表の準備をする。
- 5 翌週の授業で、実験の解説と結果を口頭で発表する。
- 6 学期末までに、実験レポートをまとめて提出する。

教員は、2と4の2週間の間にかなりの授業時間外指導をしなければならぬが、3と5の授業では実験グループに必要な助言をするだけでよい。上級生の実験ではその必要もなく、他の学生たちと一緒に実験に参加することもよくある。公平のため、最後に実験を作らせる教育の課題を1つ述べる。それは、実験担当でないときの学生の学習意欲の低下である。参加するだけのときには自分たちで作るときほど熱心になれないだろうとは予想していたが、学生とくに高学年の学生たちが、実験を参加者が楽しく勉強するための教育用のものから、実験者が何かを知るための厳密だがあまり楽しくない研究用のものにしてしまうのは、迂闊にも予想していなかった。これは科学者としての学習という教育目

的からは歓迎すべきことであるが、教員は実験グループに実験参加者を楽しませることも考えるようにとよく注意しておかないと、参加者は被験者扱いされ、学生たちが自分たちの担当する実験以外への興味を失う恐れがある。

学生の反応

学生たちは、熱心に取り組む。特に実験と報告の準備の2週間は、グループで集まって遅くまで議論や作業をしている。この過程で学生たちは経済と経済学への理解を深める。学生たちは、実験の具体化を通じて経済学を使えるようになる(たとえば漠然とX字形に需要曲線と供給曲線を描いていた学生たちが、条件に応じて理論的に両曲線を描けるようになる)。さらに実験結果と理論予想を比べることで、理論の意味と限界について考え始める。

さらに実験というプロジェクトの企画から文書による最終報告までを経験することで、学生たちの様々な能力を向上させる。とくに口頭と文書での説明能力を向上させる。

まず口頭での説明は、実験のときも実験結果の報告のときも、自分たちの言いたいことを聴き手に理解させようという目的が明確なものになる。自分たちが苦労して作った実験を参加者に正しくプレイさせたい、自分たちの得た結果を正しく伝えたいという目的がはっきりしているからだろう。もちろん目的が明確だからといって直ちに報告が明解にはならないが、説明が不正確あるいは不十分で教員が訂正や補足をするとならぬ意味がよく話し手に伝わり、次回の説明では確実な改善が見られる。

実験レポートも、論理的で結論の明徴なものになる。何か(たとえば日本の環境政策)について「調べてまとめる」発表やレポートは、知識

が不十分な学生には参考書や Web ページの抜書きに終ることが多いが、自分たちが設計・実施して細部まで完全に理解している実験を説明するレポートは「考えたことを述べる」ものになる。そのうえ、実験の説明、理論予想、実験結果、予想と結果の比較、感想と、節を分けて論理的な文章を書く良い訓練になる。(付言すると、実験レポートの読み手は担当教員ではなく同じような実験をする後輩たちである。これによって上級生から下級生へと学習活動の成果が受け渡され、実験が京都産業大学の学生たちのものとして成長していく。さらにこのなかで、読み手が誰かを意識して文章を書くと大事だが、抽象的なことも、先輩たちのレポートを読みながら、「なるほど実験の翌週の口頭発表では実験に参加した人に分るように話せばよいが、学期末の実験レポートでは実験を知らない人が理解できるように書かなければいけない」と、自分の問題として具体的に理解できる。)

今後の展開について

学生に実験を作らせる経済学教育法の確立　いま私は、実験経済学研究のプロジェクト(2001-5年度)に取り組んでいるが、計算機環境の実験など特徴のある研究と今年の国際会議の成功によって、京都産業大学は実験経済学の国際的研究拠点として認められてきたと感じる。この成果を教育に反映させ、経済学教育においても世界的拠点を目指したい。実験の経済学教育への利用は広がりつつあるとはいえ、まだまだ世界中どここの経済学部でも行われているものではない。学生に実験を作らせることで経済学を学ばせようという授業は、私の知るかぎり海外でもまだない。この教育法には経済について具体的に考えさせ一般的なプロジェクト遂行と報告の能力を高めるという効果があるので、できるだけ早く体系化して公開したい。学部学生のための経済実験の教科書は、教員が作り学生がプレイすることを前提に作られたものが

一冊(英語)しかない現状を思えば、これは有意義と確信する。

情報環境での実験　現在は現金や商品を表すカード類の交換による実験を主に行っているが、今プロジェクトで準備中の実験アプリケーションの手引きが完成して学生も読めるようになれば、情報環境での実験をもっと導入したい。ただし、実験の楽しさと理解の容易さを考えると、学生同士の対面店頭取引によるものが今後も主体となるであろう。

研究と教育の共進化　昨年、京都産業大学で講演したスミス教授にノーベル賞をもたらした業績は、大学1年生の授業のために開発された実験であった。これは、大学で教育と研究に携わるものにとって重い意味を持つ。新入生の授業など誰が教えても同じと思うと、その瞬間に自分の批判的精神を失って教育はもちろん研究も止まってしまう。教員が教科書を鵜呑みにしては教科書も教えられない。経済学の基本的な問題は入門水準に隠れて(あるいは露に)存在するのだから、これをどう理解してどう教えるか常に考えなければならない。学生の実験作りや分析の相談にのるのは、私の教育と研究の成果でもあり資源でもある。今後もこの教育を続けていきたい。



2. ビデオ教材による、税務会計の学習（マルサの女をマルサする）

経営学部 小池 和彰

(1) はじめに

マルサとは、国税局査察部のこと。この映画では、納税者の脱税の手口と、これに対抗する、内偵、張り込み、半面調査、ガサ入れなど、税務署の脱税摘発のテクニックが明らかにされています。税金をめぐる人間の欲望が渦巻く世界がハードボイルドタッチで描かれています。

主な登場人物は次のとおりです。

板倉亮子（マルサの女）	宮本信子
権藤英樹（ラブホテルの社長）	山崎努
パチンコ屋の社長	伊東四朗
花村（板倉の上司）	津川雅彦
リネンサービス社長（クリーニング屋）	佐藤 B 作
秋山（板倉の部下）	マッハ文朱

(2) 実演

先生「今日はマルサの女というビデオで、税務会計を学習します。マルサの女の監督、伊丹十三氏は、京都市のご出身で、その後愛媛県の松山市で過ごし、俳優、作家、映画監督として活躍された人物です。奥さんは、今日の映画に出演している、宮本信子さんです。宮本さんは、北海道小樽市のご出身で、夫である伊丹氏の作品、タンポポ、お葬式に出演してから、一挙に大ブレイク。現在も、多彩な演技で人々を魅了しています。」

(シーン1)

宮本信子扮するマルサの女とマッハ文朱扮する税務署員が喫茶店でひそひそ話をしている。喫茶店では、客が支払いをしているのにウエイトレスがレジペーパーを打たない映像が流れる。

ビデオ・ストップ...

先生「さて、ウエイトレスは、レジを打っていません。なぜかわかる人？」

学生「えーと、レジを打たなければ、売上の証拠がなくなるわけで、売上を除外して脱税をしようとしているんですか？」

先生「その通りや。レジペーパーというのは、売上の証拠になります。税務署はレジペーパーの売上がすべて決算書に反映されているかどうかを突合して、脱税していないかどうかチェックします。しかし、レジを打たなければ、証拠がないので、脱税できるというわけです。現金商売の場合には実は、もっと脱税が行われやすい。現金商売は、領収証のやりとりが行われず、証拠書類がない。したがって、脱税しやすいんや。」

(シーン2)

手下が山崎努扮する権藤のもとにやってきて、ある老人が亡くなったことを告げる。

ビデオ・ストップ...

先生「さて権藤は、ここでなぜ手下に倒産した会社から自分の会社に手形を振り出させているのかな？」

学生「つぶれた会社から手形を受け取っても、先生、手形は無価値やと思います。」

先生「いいところに、気がついたね。手形は確かに無価値や。つまり不渡手形になるね。」

学生「不渡りになれば、貸倒れになって、会社にとっては損になります

ね。そんなことをしても、利益はでないし、会社にとってメリットはないと思うんですが。」

先生「権藤の会社は十分利益がある、というか実は財務諸表にでている数値よりも相当利益があるんやけどね。まあそれはまた別の話やけど、利益があれば、税金はどうなる？税金を払わなくてはならないよね。その税金を払わなくてすむ方法には、売上を少なめに計上する、つまり売上の除外があるけど、別の方法として、費用を増やすという方法もある。費用を増やせば、税金は安くなるんや。」

学生「ああ、そうか。税金を減らすために、わざと貸倒れにしようとしているんか。」

先生「その通り！税法上は、貸倒損失を計上したり、債権金額全額分の貸倒引当金を積むことは、簡単ではないんや。会社更生法の適用を受けたり、手形交換所の取引停止処分を受けたりしたらあかんのや。実は、こうした貸倒れに対する税法の厳格さが、不良債権の償却がわが国で進まない要因のひとつでもあるんやけど、権藤はこの法律を逆にうまく利用しているんや。」

(3) ビデオ授業の留意点

ただビデオを見ているだけでは、退屈な学生もいる。映画の進行を考慮した設問をもうけたプリントを用意し、それに解答させ、集中力を保持させることが必要である。学習にとって重要な箇所は、ビデオをストップさせ、説明を加えるとよい。時々、リポートし、学生に考える時間を与えるのもよいだろう。

いつも同じ講義形式では、マンネリ化して、学生は飽きる。ビデオを使った授業を取り入れることで、学生はリフレッシュできる。ただ、毎時間、ビデオでは、逆に飽きるので注意しなければならない。

3. 大講義科目における Tips ~ Web 上で、教室で

法学部 吉永 一行

科目名

民法 (概論・総則・物権)

授業の内容および特徴

1 パソコン(Web)の活用

この講義のポータルサイト (<http://www.kyoto-su.ac.jp/~kazyoshi/teaching/2004/min1/>) のイメージ

2004年度春学期・民法

講義進行表

01 概論

04 債権の履行確保～人的担保と物的担保

1. 破産(復習) / 2. 人的担保～保証契約 / 3. 物的担保～抵当権

(1)を参照

(2)を参照

(3)を参照

(1) レジユメを Web で公開

- ・意欲のある学生に「いつでもどこでも」学べる環境を提供するとともに、クラブなどを理由に授業に出てこられない(こない)学生に対しても、それを言い訳にできない環境を作った。
- ・私も話すべき内容を忘れずにすみ、学生にとっても判例の日付けなど細かな情報に神経をとがらせずにすみ。またわからない部分を特定しやすいため、質問もしやすくなるようである。
- ・Web による配布で教員側の手間が省け、学生をパソコン操作に慣れさせるという効果もある。

(2) Web 上のチェックテスト

- ・JavaScript で4択の簡単なチェックテストを作成した。あくまで学生が自らの理解度を確認するためのツールという位置付けである。こうした Gimmick は学生の興味をひいたようである。

(3) 「情報」収集とその活用

- ・毎回の授業の最後の数分で授業のポイントと質問点をミニツッペー

パーに書かせて回収した。質問の多い点は、次の授業で触れるとともに、Q & Aとして公開した。法学初心者の学生がつまずきやすいポイントに気づくことも多く、授業改善に大いに役立った。

2 授業中に心掛けたこと

- ・学生に対して、シビアな成績評価を宣言する一方、シビアな成績評価を自分がしやすくするために、授業をちゃんと受けていれば単位がとれるよう「親切」な授業を心掛けた。
- ・「こうした間違いが去年あったから気をつけて」「前回の授業でこうした質問があったので、この点に注意してください」という指摘の仕方は、学生の注意をうまく喚起できるようである。
- ・4年間を通じて徐々に研究能力を高める(最終的には論文を書く)という長期的なプランを持たせる。例えば「この判決には様々な異論があるけれども、とりあえず今は触れない。興味があれば3・4回生のゼミで、報告や論文で研究して欲しい」などと折に触れて強調した。
- ・高校時代までのクセで、授業中に参考資料(辞書など)を見ることを悪いことだと思っている節があったので、こまめに「大学では高校と違って、教員に言われる前に六法や用語集を開くように」と指摘し、意識の転換を図るよう仕向けた。
- ・授業冒頭は、学生の注意を引き付ける意味も込めて、大学からの情報(奨学金など、お金が絡むものが効果的)の広報活動を行うようにした。

学生の反応

- ・レジュメは、授業当初は印刷が面倒であるとか、印刷方法がわからないという声もあった。「携帯電話からアクセスできません」という質問もあった。しかし、1カ月ほどで学生もこの方式に慣れたようである。

- ・ミニツペーパーは、毎回出席学生のかなりの部分が提出してくれ、こちらの参考になった。疑問に思ったことを(すべてではないものの)答えてもらえるという信頼関係は作れたように思う。
- ・チェックテストも比較的多くの学生が利用し、利用した学生にとって好評であった。
- ・電子メールでの質問は少数ながら利用があり、来年度も継続する予定である。ただし、書き込み件数としては少なかった Web 上の掲示板の方が利用した学生数が多いというアンケート結果があり、「自分で積極的に質問はしないが、他人の質問とそれに対する答えは見たい」という学生が多いことがわかってきた。そこで、書き込みが少ないため掲示板は閉鎖したが、来年度はブログを活用して対応しようと思っている。
- ・シビアな授業評価については、あいかわらず一部学生が試験後にいろいろと嘆願に来たので、来年度はより一層の周知徹底を図るつもりでいる。

今後の展開について

2005年度も同じ科目を担当する。2005年度はチェックテストをレジュメの中に刷り込むとともに、解答・解説をブログ (<http://blog.livedoor.jp/mimpo>) 上で公開する予定である。ブログにすることで次のようなメリットを期待している。

1. ワープロソフトと同じ感覚で文章を打ち込むと、Web 表示に最適な形で自動で処理してくれるので、HTML ページを自分で作成するよりも、教員の負担は軽減される。
2. 学生は携帯電話からアクセスすることができる。
「ユビキタス」などと気取るつもりはないが、携帯電話から利用できるということは、学生にとってハードルが低くなるようである。電子メ

ールを用いた質問も、大半が携帯からのものであった。なお、携帯からのアクセスがより容易になるよう、レジュメには解答・解説のページにジャンプできる二次元コードも載せるつもりでいる。

3. ブログのコメント機能により、学生は(携帯からでも)質問を寄せ、教員からの解答を見ることができる。同時に、質問者以外の学生も情報を共有することができる。電子メールの気楽さという点と、Web掲示板による情報の共有と、両方の効果を実現できるものと期待している。
4. 学生の中には、ブログ、二次元コードなど Gimmick の部分に興味をひかれてくれる者も出てくるであろうし、なにより、私自身がこうしたものを楽しんでいる。



4. ビデオ撮影を利用した実践的英語会話コース

外国語学部 ギリス フルタカ アマンダ

科目名

英米語コミュニケーション論 AB(2001 2004) Role play

英米語コミュニケーション論 KL (2005) English in Daily Life

授業の内容および特徴

これは英米語学科3、4年生用の英会話コースです。学生は1、2年次に英語インテンシブコースを履修し、その後、このコースを大学での最後の英語力アップのコースとして履修します。コースのねらいは、学生の受動的知識を活性化して、職場、旅行、日常生活といった場面で使用できるようにすることです。学生は2名以上のグループでスキットを演じ、ほかの学生からコメントを受けながら、最終的にビデオ映像にまとめます。さらに、このビデオ映像を使って、自分の英語の問題点の検証が行われます。クラスの人数は20～25名です。

毎回の授業では多様な活動が展開されます。まず、授業開始15分ほどはウォーミングアップとしてパントマイムを行います。学生が共同でパントマイムをしたり、グループで競争したりします。これで学生の恥ずかしさが消え、協力体制が出来上がります。学期も進んでくると、ウォーミングアップに即興劇を行うこともあります。状況設定を書いた紙を学生に渡し、その場で、パントマイムさせるわけです。箱の中に状況設定と配役を書いた紙を入れて抽選にする教員もいます。学生たちも状況設定や配役を自分たちで考えて投稿し、即興劇の種類を増やしていきます。

授業の中心はスキット作成です。テーマは教員と学生で決めますが、学生の実生活に根ざした就職面接、近所のつきあい、家族関係などが選ばれます。環境保護や犯罪と刑罰、旅行者体験や短いテレビ番組、

コマーシャルなどもあります。クラスは能力別で、能力の低いクラスでは、語彙や文法などでかなり教員の助けが必要ですが、高いクラスでは学生が自分たちの発想でどんどん進めていきます。教員は英語のていねいさ、語調などをチェックし語彙の適切さなどを指導します。

スキットの概要ができる、演技の練習がはじまります。低レベルの学生の場合は台詞をまる暗記することも多いようですが、高レベルの学生たちは、場面に合わせて自由に英語を使うように指示されます。ある程度できあがると、ほかのグループの学生の前で演じます。同じ台詞を何度も繰り返し、自然になめらかに発音できるまで練習するので、これはとてもよい発音訓練です。見ている学生は用紙にコメントを記入し、教員に提出します。これは後で、演じた学生に渡されます。コメントとして、発音の明瞭さ、演技、ジェスチャーや顔の表情、そして次回はどこを直すべきかを記入するようになっています。こうした仲間からのコメントと練習の繰り返しで学生たちの力は伸びていきます。

次はデジタルビデオカメラを使って演技を撮影する段階です。学生はカメラの使い方もすぐ慣れ、自分たちの作品を作り上げることに夢中になります。出来上がったビデオはその場ですぐに上映されますが、それだけでなく、VHSに落としてLLセンターで学生が宿題として観ることになります。そして、自分と仲間の演技を比べ、自己評価表に記入します。さらに、自分の台詞まわしを転写することも課題です。自分の間違いを、紙面で訂正し、そのあと十分に練習して再度ビデオ撮りをします。この授業では、授業外でしなければならないことが数多くあるので、す。

ビデオ撮影の利点はほかにもあります。その1つは教員と学生がビデオによって英語の上達をともに確認できることです。これは成績を出す場合に教員の大きな助けになります。また、教員と学生と一緒に行うビデオ編集の作業があります。これは楽しみでもあり、また、英語教育

の一環でもあります。なによりも、ビデオが作品として残るということから、このクラスの学生にとって、大きな達成感のある授業となっています。

学生の反応

当然ですが、学期はじめて、しかも友達のいないようなときには、学生たちは非常にシャイです。また、カメラの前で演技をするのも、初めはたいへんなことです。しかし、自分の演技が見られているということやビデオ撮影ということが励みになって、練習にどんどん熱が入ってきます。これは見る人が教員と数人の学生だけという場合とはずいぶん違うのです。ひとたび自分の発想が動き始めると、もう教員の助けなど不要で、学生たちは衣装や小道具を持ち込み、撮影をどんどん派手なものにしていきます。学生たちが夢中になっているのは、教員の目にも明らかで、1学期が終るときには、学生たちの大部分が、「楽しかったし、いろいろな状況で英語で反応できるようになった気がする」と自信を見せます。ほとんどの学生にとって、この授業は自分の使う英語を聞き、見る初めての機会です。それでこの授業は学生たちの大きな動機付けになっているのです。

今後の展開について

このコースが継続し、さらに発展していくためには、LLセンターの存在が大きいと言えます。デジタルビデオのテープをVHSにダビングしたり、テープ編集をしたり、学生が課題としてビデオ映像を検証したりする作業はほとんどLLセンターで行われます。このセンターが今後、学生にとっても教員にとっても、より使いやすいものになっていくことを希望しています。

5 . グループワーク導入の試み

文化学部 鬼塚 哲郎

筆者はここ数年、大学コンソーシアム京都が提供するコーディネート科目の一つ『支えあう健康～エイズと社会』（開講主体は本学の体育教育研究センター）でコーディネーターを務めている。そこでの授業で、HIV 感染のメカニズムと予防方法を受講生に伝えようとしている。伝える方法には次の三つが考えられる。

- 1.情報伝達型:内容をそのまま述べる。
- 2.一部参加型:「感染とは何か?」「汚染と感染はどう違うか?」「HIV の場合、感染に関与する体液はどれとどれか?」「粘膜はヒトの身体のどこの部分か?」「HIV 感染を予防するにはどうすればよいか?」などの一連の質問を受講生に投げかけ、指名してその場で答えてもらうか、紙に書いて提出してもらい、答えの内容を検討しながら説明を展開していく。
- 3.グループワーク型:以下のようなプロセスをたどる。

5～7名くらいずつのグループに分かれる。その際、受講生がグループ分けに参加できる方法(たとえばくじ引き等)でやるのが望ましい。主体的に参加するインセンティブとなるからである。

必要なら自己紹介を行い、進行役と記録係を決める。

グランドルールを説明する。主な内容としては、a プライバシーに配慮すること、b ディスカッションが目的かそれとも情報の共有が目的かを告げること の2点。

テーマを提示する。例えば「HIV への感染を予防するにはコンドームが有効と言われているが、それはなぜか」。同時に、正しい答えを見つけるのが目的か(この場合はディスカッションとなる)、それともグループ構成員の経験や感情を共有するのが目的か(この場合は経験や見解の表明と受け止めが中心となる)をはっ

きり告げる。

テーマについてグループ内で話し合う。 教員は必要ならファシリテーターとして介入する。ファシリテーションの中味は、「無理に発言する必要はないよ」「反対意見を言うまえに皆の意見をよく聴こう」「進行役はなるべく全員が参加できるような雰囲気をつくろう」等々。

話し合いの結果を記録係がまとめ、クラス全体で共有する。 共有の方法としては、メモを読み上げる、板書する、などの方法が考えられる。

共有された情報を教員が評価する。 この場合、正しい答えは「三つの体液(血液、精液、膣分泌液)が粘膜に触れるのをブロックするから」であるが、すべてのキーワードが受講生から提示されるとは限らないので、足りない場合は補足する。正しい答えを求めるのが目的でない場合は、情報を共有することの意義を教員自身が身をもって示すことが大切であろう。

上記の内容を表にまとめると：

	情報伝達型	一部参加型	グループワーク
テーマの設定	HIV 感染のメカニズムと予防方法	「感染とは何か」「汚染と感染はどう違うか」「HIVの場合、感染に関与する体液はどれとどれか」「粘膜はヒトの身体のどの部分か」「HIV 感染を予防するにはどうすればよいか」	「HIV への感染を予防するにはコンドームが有効と言われているが、それはなぜか」
学習のプロセス	教員による説明	教員による問い、受講生による回答を繰り返しながら説明を展開	グループ分け 自己紹介、進行役と記録係の決定 グラドルールの

			説明 テーマの提示 グループ内での 作業 結果の共有 教員による評価
要する時間	5分	15分	45分
長所	<ul style="list-style-type: none"> ・時間がかからない ・テーマを選ばない 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容に関心を持ちやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の定着度が高くなる ・他の受講生と出会う ・プライバシー、守秘義務について学習する ・グループの運営について学ぶ
短所	<ul style="list-style-type: none"> ・試験が終われば忘れられる可能性がある 		<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ設定に工夫が必要 ・時間がかかる

私見では、グループワークを成功に導く条件は以下の3つである。

- (1) 提示されるテーマは、受講生がこれまでの学習や日常の経験から自分なりの考えを導き出せるようなものでなければならない。
- (2) 時間をたっぷり取る。
- (3) 教員は指導し過ぎず、ファシリテーターに徹する。

グループワークは ~ のようなプロセスを経るため時間がかかるが、(1) ~ (3)の条件がそろえば定着度は飛躍的に高まると考えられるし、表に掲げたような副産物もある。グループワークに慣れていない受講生は敬遠しがちだが、実際に経験した場合の満足度は高い。

最後に、受講生の声をレポートからいくつか拾ってみよう。

*「これまでグループワークというものをしたことがなかったので、正直言うと、さぼろうと思っていた。しかし、グループワークがないうと勘違いしてた時間に教室に居てしまった。“しまった”と思ったが、仕方なく受けることにした。グループが分けられ席に付くと、知らない人と同じグループでぎくしゃくした感じだった。しかし一旦グループワークが始まると、今まで会うことさえなかった人たちと会話することができて楽しかった。また性やエイズについて人と話し合ったことなどなかったので、少し恥ずかしかったが、有意義な時間であったとも思う。」

*「グループワークでは、他大学の学生の意見を聞くことができ、自分の中で非常に勉強になったと感じる。こういう機会というのはなかなかないものだ。自分の意見だけでなく他人の意見を聞くことで様々な視点から深く追求することができたいい機会であった。」

*「グループワークは非常に面白かったです。さすがに初めは、知らない人といきなり話すということに抵抗があって、それこそ『間もたない』だったのですが、徐々に打ち解けてくると性行為や性病など本来かなりとっつきにくい内容であるはずなのに、皆自然と意見が出てきたので、そういう面で他のメンバーの真剣さを感じる事ができました。全然知らない同世代の人と話すことが逆に真剣さを生み非常に良かったです。また、僕が言うのも変な話なのですが、研究者側にとっても本当にこういったインタラクティブな機会は非常に大切で、むしろ実情を知るにはこの手段しか無いといってもおかしくないと思いました。」

6. ディベートに特化した授業

文化学部 小林 一彦

科目名

日本語表現

授業の内容および特徴

授業では日本語を「話す」という能力の開発に重点を置き、ディベートを通じて実社会で使える日本語力の修得をめざしています。ディベートを採用したのは、日本語を使って論理的な思考を組み立て、併せて日本語を巧みに操りながら多くの聴衆を納得させ、自らの意見への理解者・同調者を増やすようなプレゼンテーションの方法を身につけてもらうことを、特に重視したからです。この授業の開設時以来、学内のすべての教室を見てまわり、ディベートに最適な教室を選んでいきます(現在は300名収容の中教室)。3ヵ月後には、履修者のほとんどが、マイクなしで教室の隅々まで響く堂々とした声で、自分の意見を秩序立てて開陳できるようになっています。

授業は学生が次々とステップを踏み、1週ごとにスキルアップが体感できるようなシステムで行われています。

1. ディベートの実際を見る…ディベートが初めてという学生も多いので、スクリーンに「ディベート甲子園高校決勝」を投影し、定められた*「ジャッジペーパー」(A3)に採点記入。ディベートの実見と採点の実際を経験。
2. 論題(テーマ)の公募・決定…宿題として用意してきた論題(候補)を学生から提出させる。論題にふさわしいものを選択・採用。特に賛否の分かれる社会的な問題を意図的に選ぶことで、時事問題に関

*「ジャッジペーパー」の現物は、p.101に掲載

心を寄せる契機をつくる。問題を肯定・否定の立場から徹底的に調査・分析・討議する過程で、考えを深め自説を形成する。

3. チーム(1チーム4名、8チーム)のグループ分け、および対戦組み合わせ抽選・・・ランダムに学生をチームに振り分ける。人間さまざまな個性・条件がある。それぞれ背負っているものは相違する。それを克服してチームで協力、戦うのがディベート。抽選後は、チームごとにグループを作り、名刺交換・作戦会議。初対面の相手とも協力して物事を成し遂げる力を養う。
4. ルールブック・タイムテーブルの開示・・・構成員はジャッジ1名(教員)、アシスタント2名、ディベーター8名、オーディエンス22名。ディベートの勝敗はジャッジペーパーの集計による。勝利チーム60点(うち最優秀ディベーター1名90点)、敗者チーム40点(うち敢闘ディベーター1名60点)。ジャッジペーパー一枚提出ごとに10点(優秀ジャッジペーパーにはプラス5点)。アシスタントは前回の最優秀・敢闘ディベーター2名が担当し、ジャッジペーパーの配布・回収、ストップウォッチによる時間管理、タイムベルによる合図を担当。
5. 論題の公開抽選・・・2週間後の対戦チームからそれぞれ代表者が演壇に出て、くじを引く。選択権はくじを引いた側にあり。
6. ディベート開始・・・授業開始前、空き教室から机・椅子を演壇に移動。チームごとにベンチを作る。ジャッジは論題を投影機で2面のスクリーンに大きく掲示。「肯」「否」および選手の氏名を黒板に磁石でとめる。タイムベルの合図でディベート開始。肯定側立論(5分) 否定側質疑(3分) 否定側立論(5分) 肯定側質疑(3分)・< 作戦タイム1分 >・否定側第一反駁(3分) 肯定側第一反駁(3分)・< 作戦タイム1分 >・否定側第二反駁および最終結論(4分) 肯定側

第二反駁および最終結論(4分)。ジャッジペーパーの回収・集計。勝敗・個人賞の発表、教員による本日のディベートの講評・総括。2週間後の対戦の論題抽選。来週の対戦確認。

7. 成績評価・・・2回のディベート(2回とも別グループ、1回ごとに組み合わせを行う)の勝敗、および最優秀・敢闘ディベーターなどの個人賞、ジャッジペーパーの内容と提出状況(出欠と連動)、等々をそれぞれ点数化し、その合計によって評価する。学生による相互評価が、成績判定の重要な要素となっており、学生が評価を行う授業である。

以上が、当該授業のおおよその内容と特徴です。

学生の反応

きわめて熱心で、欠席・遅刻・途中退出、さらに授業中の私語などもまったくありません。投影機による論題の掲示、自分の名前が張られた黒板、舞台上の机と椅子と資料、司会による整然とした進行、タイムベルの音、演壇でのプレゼン、質疑応答・・・教室のしつらえにも工夫をしていますので、学生はあたかも自分がシンポジウムのパネラーになったかのような錯覚を覚えるようです。

学生は、さまざまな利害関係が複雑にからみ合う高度な社会問題を、わずか2週間で調べ上げなくてはなりません。しかも、肯定・否定という極端な立場でのみ、意見表明が許されているという難条件です。4名は、入学したばかりで知らないもの同士、住んでいるところも性別も出身高校も考え方も(時に国籍も)違います。だからこそ、4人全員が、それぞれ役割を着実に遂行し、効率よく集まって討議を重ねないとディベートに勝利することはできません。

この濃密な2週間の準備期間が、この授業に参加する学生の意識を飛躍的に高めているといえると思います。負けた場合の悔しさも、また

次回へのバネになっているようです。

自分たちが真剣に記入した、1枚のジャッジペーパーが、自分も含めたクラス全員の成績を左右する、という自覚も、受身でない、自分たちが作る授業なのだ、という共通認識を生んでいるようです。ゼミでもなんでもない、共通科目なのですが、学期末には、教員を囲んでコンパを開く雰囲気があるまにか出来上がっているのも、この授業の特筆したいところです。

今後の展開について

なるべく多くの意欲のある学生に参加してほしいのですが、授業の性格上、どうしても32名を超えた場合、断らなくてはならないのが最大の悩みです。5時限目に設定して参加者を絞ろうと思っても、年々、先輩からの勧めや口コミで、競争倍率が上がっています。

見学は随時OKです。開講した平成12年春から公開していますので(これまで教員のべ20名ほどが見学)、教員のみならず事務職員の皆様にもものぞいてほしいと思います。そして、ディベートの輪が拡がり、ぜひ、今後は同種の授業を学内に増やしていけたらいいなと考えています。

ジャッジペーパー

()月 ()日

学部	学科	専修	学生証番号	氏名
----	----	----	-------	----



本日の論題()

論点要約

肯定側立論	否定側質疑(反対尋問)
主張の説得力・論理性 (S A B C D) プレゼンテーション度 (S A B C D) 反対尋問への応答状況 (S A B C D)	質疑の活発さ・積極性 (S A B C D) 質問の鋭さ・的確性 (S A B C D) プレゼンテーション度 (S A B C D)

肯定側質疑(反対尋問)	否定側立論
質疑の活発さ・積極性 (S A B C D) 質問の鋭さ・的確性 (S A B C D) プレゼンテーション度 (S A B C D)	主張の説得力・論理性 (S A B C D) プレゼンテーション度 (S A B C D) 反対尋問への応答状況 (S A B C D)

肯定側第1反駁	否定側第1反駁
論拠補強的確さ・効果度 (S A B C D) 相手側への新たな反論提起 (S A B C D) プレゼンテーション度 (S A B C D)	論拠補強的確さ・効果度 (S A B C D) 相手側への新たな反論提起 (S A B C D) プレゼンテーション度 (S A B C D)

肯定側第2反駁および最終結論	否定側第2反駁および最終結論
立場の一貫性 (S A B C D) 議論の整理把握度・論点の総括度 (S A B C D) プレゼンテーション度 (S A B C D)	立場の一貫性 (S A B C D) 議論の整理把握度・論点の総括度 (S A B C D) プレゼンテーション度 (S A B C D)

チームワーク度 (S A B C D) 資料やデータの活用度・分析度 (S A B C D) 相手側の意見を聞く態度 (S A B C D) チーム内で健闘していたと思われる人()	チームワーク度 (S A B C D) 資料やデータの活用度・分析度 (S A B C D) 相手側の意見を聞く態度 (S A B C D) チーム内で健闘していたと思われる人()
--	--

あなたの判定 どちらがディベートに勝利したと思うか () を記入)。 肯定側 () 否定側 ()

判定理由

7 . PowerPoint 教材による授業の一つの試み

理学部 藤井 健

(1) PowerPoint 教材利用の長所と欠点

学会発表や講演では、以前はOHPが中心であったが、現在では、PowerPointにより作成したスライドの映写が中心である。これと並行して、授業にもPowerPointにより作成した教材を使ったものが増えてきている。ただ、PowerPoint教材による授業は、学会発表や講演とは目的が異なっており、従来の板書形式と比較して、それよりも教育効果が上がることを確認しなければならない。そこで、PowerPoint教材による授業の長所、欠点および注意すべき点をまとめると、次の通りである。なお、これはあくまで、著者の経験に基づくものであり、主観的な見方も入っていることをお断りしておく。

【長所】

豊かな色彩により視覚に訴えることができる。

文字は、小さくなければ読みやすい。

ペンを使い、映写中に書き加えることができる。

アニメーション機能の使用により、説明と連動してテキストや画像を映写していくことができる。

ハイパーリンク機能で、スライドから直接にインターネットや他のファイルにリンクできる。

スライドの修正が容易である。

【欠点】

スライドは1枚ずつしか映写できない。そのため、ノートを取る時間が制約される。

教室を少し暗くしないと見にくい。

プロジェクトが設置されている教室が必要である。

パソコンを立ち上げなくてはならず、授業開始前に教室で準備をする必要がある。

スライドを作成するのに時間がかかる。

【注意すべき点】

文字のサイズは、教室の最後席からでも見えるようにする。

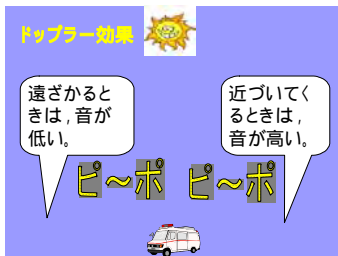
ノートを取る時間が制約されることの欠点を補うために、6枚のスライドを A4紙1枚にまとめてプリントして配布することがある。学会発表や講演では、内容の理解に大いに役立つのであるが、授業においては、板書された授業の内容をノートに取るという作業の教育効果も忘れるべきではない。

PowerPoint と板書のそれぞれの特徴を活かして併用すると、より大きな教育効果が期待できる。とくに、板書ができる内容、例えば箇条書きなどは、板書の方がノート筆記の遅い学生にも対処できる。

(2) 具体的実践例 人間科学教育科目『気象の科学 B』

ドップラーレーダーによるダウンバーストの検出について。

【PowerPoint】によるプレゼン



【アニメ】救急車を繰り返し、右から左へ走らせる。

【口頭説明】救急車が近づくときは音が高く聞こえ、遠ざかるときは低く聞こえる。これは、音波の周波数が変わるためである。これをドップラー効果という。

【板書】ドップラー効果の説明

ドップラーレーダーによるダウンバーストの検出

ドップラー効果

- 近づいてくる物体からやってくる音波や電波は周波数が高くなる。
- 遠ざかっていく物体からやってくる音波や電波は周波数が低くなる。

【板書】ドップラーレーダーの説明

ドップラーレーダー

地上のアンテナから、上空のさまざまな方向に向かって電波を発射する。

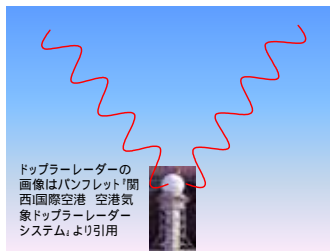


上空の降水粒子の反射によって戻ってきた電波の周波数の変化を調べる。



上空空気の収束・発散が分かる。

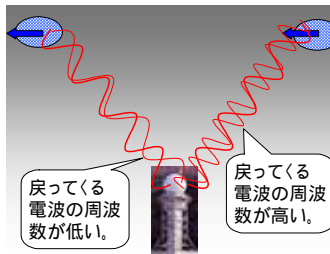
【PowerPoint】によるプレゼンに戻る。



【アニメ】レーダーから電波を繰り返し送る。

【口頭説明】ドップラーレーダーより電波を放出する。

【PowerPoint】

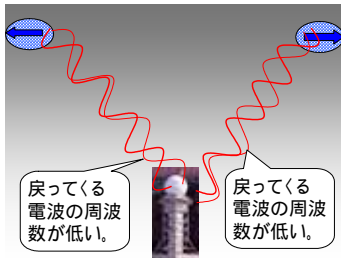


【アニメ】レーダーから電波を送り、降水粒子で反射して戻ってくる変調した電波を繰り返し表現する。

【口頭説明】上空の降水粒子で電波が反射して戻ってくる。救急車の音と同じく、降水粒子が近づいているときは、周波数が高く

なり、遠ざかるときは低くなる。

【PowerPoint】



【アニメ】前のスライドと同様に往復する電波をアニメで繰り返し表示す。

【口頭説明】どの方向から戻ってくる電波も周波数が低くなれば、上空の気流は水平方向に発散している。

【板書】プレゼンを中断して板書する。

どの方向から戻ってくる電波も周波数が低くなっている。

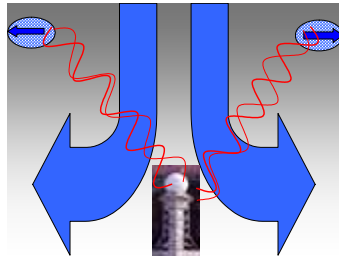


上空で気流が発散している。



ダウンバーストが発生する可能性がある。

【PowerPoint】によるプレゼンに戻る。



【アニメ】前のスライドと同様に電波をアニメで表すとともに、上空から下降して、地上付近で発散する気流を矢印で繰り返し表示す。

【口頭説明】気流が発散しているときには、下降流が起こりやすく、ダウンバースト発生の可能性がある。空港では、離着陸する航空機が失速して、墜落する危険性がある。

参考文献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹
『成長するティップス先生』玉川大学出版部、2001年。
- 大村まま・苅谷剛彦・苅谷夏子『教えることの復権』ちくま新書、2003年。
- 苅谷剛彦『教育改革の幻想』ちくま新書、2003年。
- 児玉善仁・別府昭郎・川島啓二編
『大学の指導法 学生の自己発見のために』東信堂、2004年。
- 古宮昇『大学の授業を考える』晃洋書房、2004年。
- 斎藤孝『コミュニケーション力』岩波新書、2004年。
- 授業改善ハンドブック編集委員会編
『あっとおどろく授業改善-山形大学実践編-』山形大学教育方法等改善委員会、2003年。
- バーバラ=グロス=デイビス(香取草之助監訳)
『授業の工具箱』東海大学出版会、2002年。
- ピーター=サックス(後藤将之訳)『恐るべきお子さま大学生たち』草思社、2000年。
- 溝上慎一『現代大学生論』日本放送出版協会、2004年。
- 村上龍『13歳のハローワーク』幻冬社、2003年。
- 茂木秀昭『ザ・ディベート』ちくま新書、2004年。
- ロンドン大学教育研究所大学教授法研究部(喜多村和之・馬越徹・東曜子編訳)
『大学教授法入門 大学教育の原理と方法』玉川大学出版部、1982年。

索引

アルファベット

OHP	31, 37, 39, 102
PowerPoint	31, 37, 39, 72, 79, 102, 103, 104, 105
Web	27, 54, 81, 86, 88, 89


あ行

アンケート	1, 9, 28, 41, 44, 58, 66, 70, 72, 73, 75, 88
オフィスアワー	42, 53, 64, 70

か行

合宿	14, 18, 24
教科書	30, 31, 66
教材	20, 30, 31, 33, 39, 64, 83, 102
教授法	9, 10, 11, 12, 72, 73, 76
グループ学習	45, 47, 52, 54, 55, 65, 70, 93, 94, 95, 96
(グループワーク)	
公開授業	71, 72, 73, 74, 75, 76
コミュニケーション	24, 40, 41, 42, 59, 60
コンパ	14, 18, 24, 42, 76, 100

さ行

私語	20, 28, 42, 43, 44, 52, 99
自己紹介(ゲーム)	16, 18, 19, 93, 94
質問	32, 35, 36, 46, 48, 64, 66, 67, 68, 70, 86
	87, 88, 89, 93
授業改善	1, 24, 26, 31, 39, 52, 55, 63, 70, 76, 87
( 授業改善のヒント)	
授業参観	72, 74, 75, 76
小テスト	28, 33, 53, 55, 58
ジャッジペーパー	97, 98, 99, 100, 101
シラバス	23, 26, 27, 28, 30, 31, 32, 57, 75
スキル	74, 75, 76, 97

成績評価	23, 28, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 87 99
た行	
チェックテスト	86, 88
ディスカッション	15, 16, 17, 18, 47, 48, 93
ディベート	17, 49, 50, 51, 52, 97, 98, 99
は行	
話し方	33, 35, 66
板書	35, 36, 37, 39, 66, 73, 94, 102, 103, 104, 105
ビデオ	31, 38, 83, 84, 85, 90, 91, 92
ピアレビュー	72, 75
プリント	29, 31, 32, 36, 37, 39, 53, 85, 102
プレゼンテーション (プレゼン)	31, 38, 97, 99, 103, 104, 105
ブログ	88, 89
ま行	
マークシート	8, 63
ミニツツペーパー	86, 87
メール	40, 54, 64, 70, 88, 89
ら行	
留学生	68, 69, 70, 74
レジュメ	46, 66, 72, 73, 86, 87, 88, 89
レポート	28, 33, 53, 54, 55, 58, 60, 61, 69, 75, 79, 80, 81, 95

編集後記

人は、何か物事が身の回りで見ると、その原因を探し、説明を試みるものである。しかし授業がうまくいかに進行している場合には、その原因を自分に帰属させ、他方、授業が思うように進行しない場合に、その原因を学生だけに帰属させることを教員はすべきではない。魅力的な授業を展開して、学ぶ意欲を起こさせ、学生が授業に積極的に参加するように、教員は学生を導かなくてはならない。

学生の成長を促すために、教員は具体的な努力をすべきであって、本書では、学生の名前を覚えること、学生と様々な方法でコミュニケーションをとること、そして、学生を積極的に褒めて挑戦する気持ちを持たせることが、強調されている。教員は、学生の人格を尊重し、コミュニケーションを上手にとって、失敗にめげないで挑戦するよう学生をリードすべきである。失敗を乗り越えて、挑戦していくことで、人は成長し、また成功も得られる。したがって、失敗を責めるのではなく、再び挑戦する気持ちを学生を持たせるように教員は努力しなければならない。

本書の前半は京都産業大学教育エクセレンス支援センターのFD推進委員が執筆を分担し、後半は京都産業大学の何人かの教員にお願いして、授業改善の具体的な試みをお書きいただいた。しかし本書(特に前半)の執筆者は京都産業大学全教員であると言えないこともない。なぜなら、本書は、2003年11月以降二度にわたって京都産業大学で実施されたFDの現状を把握するために行われたアンケート結果から、共通するもの、あるいは、有用なものを抽出して、集約したものであり、京都産業大学の全教員の経験が本書のベースとなっているからである。

執筆や編集にあたって、FD推進委員会では、各委員が持ち寄った原稿の内容、文体を検討、推敲する作業を繰り返した。本書の前半において、会話体を採用していたり、関西弁の登場人物がいたり、そして

節ごとに要約を設けるなどは、委員会で生まれたアイデアである。委員会における議論の内容をそのまま挿入した文章も本書にはある。また、表紙を含め、イラストは本学経済学部4年生でデザイン部の学生である佐伯聡仁君に協力してもらった。就職活動で忙しい合間を縫って描いてくれたことに大変感謝している。

本書をまとめるにあたって、我々メンバー自身も、本書の執筆、編集にあたって真剣に教育の話をし、またこれまでの教員生活の反省も行うことができた。委員会のメンバーには、本当に感謝している。

本書の中心的なとりまとめは、私と、井奥成彦、河原地英武で形成した作業部会が行ったが、教育エクセレンス支援センター事務局の渡邊純一さん、下井美樹さん、西澤美弥子さんには、本書を手がけてからおよそ2年もの間、辛抱強くサポートしていただいた。心からお礼を申し上げます。

2005年3月31日

京都産業大学 教育エクセレンス支援センター
FD推進委員会
ティーチング・ティップス集作成作業部会

小池 和彰

執筆者一覧

河野 勝彦 教育エクセレンス支援センター長（副学長）
藤井 健 教育エクセレンス支援センター副センター長（理学部教授）
井奥 成彦 F D推進委員（経済学部教授）
小池 和彰 F D推進委員（経営学部助教授）
耳野 健二 F D推進委員（法学部助教授）
河原地英武 F D推進委員（外国語学部教授）
鬼塚 哲郎 F D推進委員（文化学部助教授）
山本 啓二 F D推進委員（文化学部助教授）
牛瀧 文宏 F D推進委員（理学部助教授）
安田 豊 F D推進委員（理学部講師）
瀬尾 美鈴 F D推進委員（工学部教授）
卯野 優 F D推進委員（体育教育研究センター教授）
松原 久利 F D推進委員（法務研究科教授）
小田 秀典（経済学部教授）
吉永 一行（法学部講師）
ギリス フルタカ アマンダ（外国語学部講師）
小林 一彦（文化学部教授）

イラスト 佐伯 聡仁（経済学部4年生）

「授業改善のヒント-京都産業大学の試み-」作業部会
部会長 小池 和彰 F D推進委員（経営学部助教授）
井奥 成彦 F D推進委員（経済学部教授）
河原地英武 F D推進委員（外国語学部教授）

事務担当

渡邊 純一（学長室課長）
下井 美樹（学長室）
西澤美弥子（学長室）

内容に関するご意見・お問い合わせは、下記アドレスまでメールでお願いします。

学長室教育エクセレンス支援担当: ex-shien@star.kyoto-su.ac.jp



授業改善のヒント -京都産業大学の試み-
平成 18 年(2006 年)1 月 19 日発行

編集：京都産業大学 FD 推進委員会
発行：京都産業大学 教育エクセレンス支援センター
〒603 8555 京都市北区上賀茂本山
TEL:075-705-1729 FAX:075-705-1412

本書の全部または一部の複写、複製、転載を禁じます。

